

## 35号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

40号は北支群南よりの斜面にあり、南西方向に開口する。全長は約5.9mを測り、主軸方向をN-70.5°-Eに取る。保存状態は良好であった。斜面の遺構検出作業中に前庭部埋土の土色の変化を認め、横穴墓発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込みなどは認められなかった。調査は供獻土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の検出、調査、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設の除去後、埋葬人骨の遺存が確認されたため、玄室内の調査は一旦中断した。数日後、九州大学医学部第二解剖学教室員の参加協力の上で改めて玄室内の調査を実施した。

### 2. 規模、構造

#### 1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約3.1m、幅約1.8mであり、ほぼ長方形の様相を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される黒褐色の風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面はゆるい凹凸があるがほぼ平坦であり、羨道は一段高くなる。側壁の傾斜は65~70°を測る。また、羨門部壁の傾斜は約80°を測る。

羨門は天井部に若干の崩壊が認められるものの、保存状態は良好である。規模は高さ0.7m、幅0.65mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の2群に分けられる。第1群は幅、厚さ共10cm、長さ25cm程度の河原円礫が1個と安山岩製板石が3枚である。これらを立てかけるようにして羨門部を覆う。第2群は幅、長さ20~40cm程度の河原石および地山包含円礫30~40個からなり、1群全体を覆う。第2群上部の石は、配石の状況がやや乱れている部分があり、追葬時に動かされた形跡がある。以上の配石によって前庭部は面積、堆積共におおよそ半分が埋まる。この配石の上に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から、比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で5層群6層に分層した。以下、堆積順に説明を加える。

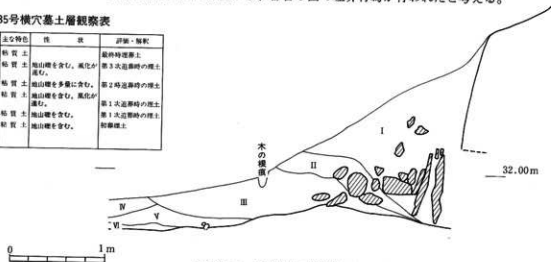
第1層群 (VI層) は初葬時の前庭部内埋土と推定される。内部に地山礫を含み、前庭部形成時に堆積した基盤層を含むが、上面は風化している。

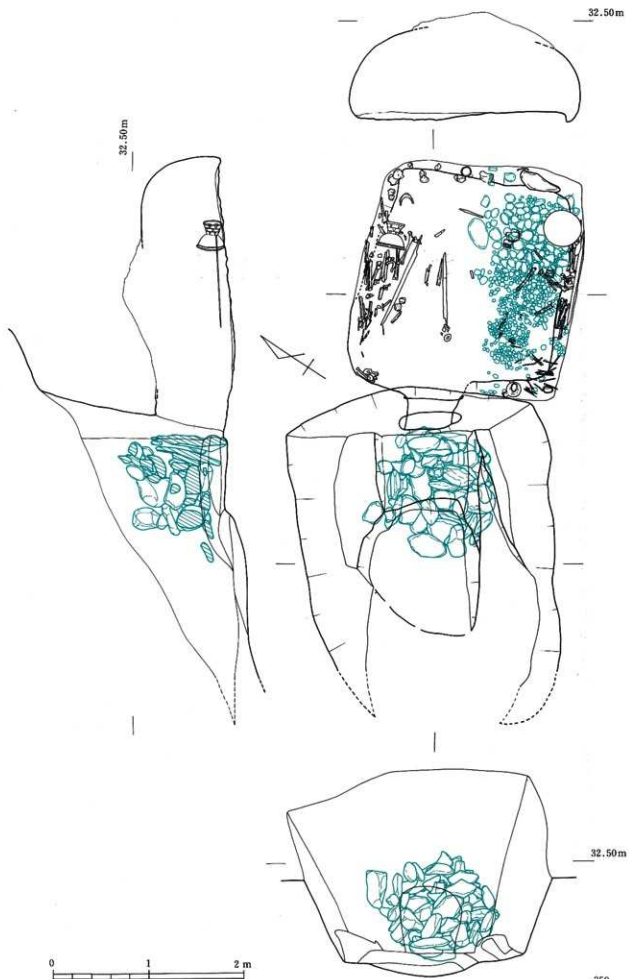
第2層群 (IV・V層) は2回目の埋葬に伴う前庭部内埋土で、さらに2層に細分される。このうち下層は地山礫を含む基盤の二次堆積層で、上層は風化土層である。

第3 (III層)・4 (II層)・5 (I層) 層群は、それぞれ3・4・5回目の埋葬に伴う前庭部内埋土で、いずれも上面は風化が進んでいる。前庭部内埋土の状況から、都合5回の埋葬行為が行われたと考える。

35号横穴墓土層観察表

層	色	調	主な特色	性状	評価・解釈
I	黒褐色	粘質土		地山礫を含む、風化が進む。	最終埋葬土
II	暗茶褐色	粘質土		地山礫を含む、風化が進む。	第3次追葬時の埋土
III	黄褐色	粘質土		地山礫を多量に含む、風化が進む。	第2次追葬時の埋土
IV	淡茶褐色	粘質土		地山礫を含む、風化が進む。	第1次追葬時の埋土
V	茶褐色	粘質土		地山礫を含む。	第1次追葬時の埋土
VI	茶褐色	粘質土		地山礫を含む。	初葬埋土





第209图 35号横穴墓平·断面图

## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.52m、長さ0.34mを測る。床面は7°前後の緩い傾斜で玄室に向かって下降し、玄室との接続部分で最深となる。天井部は床面とほぼ平行である。玄室はドーム形を呈し、長さ2.48m、幅2.32m、高さ0.75mを測る。床面は標高31.45mで、中央部にむかってゆるやかに凹む形状となる。玄室床面には5-10cm程度の埋土を行っている。玄室北側には礎床を設ける。礎床は奥半部を長さ・幅とも10-20cm前後の河原円礫、手前の部分に直径5cm前後の河原円礫を使用している。なお、奥半部の礎床間には小円礫が認められ、礎床の敷き替えを示すものとみられる。

玄室内には、一部に天井部の崩落による堆積土も認められたが、礎床部分の大半は埋没から免れていた。

## 3) テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上約4.5m付近に階段状の地山整形が認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、ほぼ直線状となる。上場線は標高30.8mであり、約40cmの段となっている。整形に直行する土層観察が不十分のために盛土など墳丘に関する遺構の存在は不明である。(吉田 寛)

## 3. 遺物の出土状態

### 1) 玄室内

a) 埋葬人骨 少なくとも7体が埋葬されていた。羨門からみて右側に設けられた礎床上に2体、玄室左側に4体、中央部に1体が検出された。

1号人骨は、礎床上ではあるが、下肢は1ヶ所にまとめられ、下顎は寛骨の位置にあって、明らかに動かされている。成年男性で、直刀を伴い、本来は奥壁に接する石枕を用いて礎床中央に葬られたものと考えられる。

2号人骨は、1号人骨を片付けた後に礎床上に葬られた熟年男性である。しかし、頭と大腿骨が異常に近く、原位置を保つものではない。

3号人骨は玄室左側に埋葬された熟年男性である。脛骨を大腿骨と一まとめにしてあり、明らかに動かされている。しかし、頭蓋骨・下顎骨・上腕骨・前腕骨・大腿骨のそれぞれの位置関係にはそれほど大きな乱れはないことから、下腿を除けば、左側壁へと押しやられた状態といえよう。玄室左側に埋葬された4体中最も壁寄りに位置することから、4体の中では先行して葬られ、直刀もこの3号人骨に伴うと考えられる。

4号人骨は小児で、頭が原位置に近いとすれば、3号人骨の横に葬られたものと考えられるが、上腕骨は3号人骨上腕骨の隣りにあることから、少なくとも四肢骨は片付けられている。

ところで、3号人骨を壁ぎわへと押しやったのは、この4号人骨を葬った時かもしれない。しかし、小児の埋葬に3号人骨の下肢までが邪魔になるわけではなく、また、玄室左側には、他に2体分の成人骨が認められるので、これら成人骨の埋葬に際して3号人骨が片付けられたと考えるべきであろう。これらの成人骨は、④・⑤で示した大腿骨と⑥・⑦で示した脛骨で、いずれも成人男性のものである。大腿骨と脛骨の対応は明らかにしえない。位置関係からみて、大腿骨⑥の被葬者を埋葬する際に3号人骨を片付けたと考えられるが、この⑥もさらに④・⑤・⑦も動かされ、原位置を保ってはいない。また、これらに対応する頭蓋骨は玄室左側には認められない。



第210图 35号横穴墓玄室内人骨出土状图

さて、5号人骨は、玄室中央部の奥壁近くに頭蓋骨があり、落石のため二分している。熟年男性で、頭が原位置をそれほど動いていないとすれば、玄室中央の長軸にそって体部骨があったはずであるが、全く認められない。この部分は落石や土砂の流入で人骨の保存が悪かったことから、頭以外は消失したと考えることもできるが、小刀が胸部を横切るような位置にあることから、動かされたとすべきであろう。そして、玄室左側には対応する頭蓋骨を欠いた成人男性骨2体分があり、大腿骨⑩上の下顎骨も熟年と推定されることから、これら2体のうちいずれかが5号人骨のものと考えられる。さらに、既述のように、3号人骨との関係から、むしろ、大腿骨④や近くの寛骨等が5号人骨の体部骨として妥当であろう。したがって、5号人骨は、玄室中央部に埋葬され、その後体部骨は玄室左側へと片付けられて、その際に大腿骨⑩の成人男性骨を原位置から動かしたものと推察される。直刀も、5号人骨に伴ったものが、人骨を片付ける時に動かされたものと理解しうる。

6号人骨は、左右大腿骨のみであるが、羨門の方が近位であることから、1号～5号人骨とは差し違えに葬られた被葬者である。左右大腿骨の位置関係は原位置のままであり、唯一動かされていない被葬者、すなわち最終埋葬者と考えられる。大腿骨の右隣りには切先を奥壁、すなわち、足元へと向けた直刀がある。

さて、以上から本横穴墓被葬者の埋葬順位を検討する。時期をある程度特定するには副葬土器を用いるのが最も有効ではあるが、玄室右側の須恵器大甕も、左側の須恵器器台も、片付けられた人骨の上に置かれたものであり、本来の位置を動かされている。しかし、羨門部右の提振は原位置である可能性が強く、6号人骨に伴うと考えられる。玄室中央部奥の礎は、5号人骨に最も近いが、枕にしたような状態であり、むしろ再利用の観が強い。

そこで、土器に頼らずに人骨の状態から検討する。まず、1号人骨が初葬で、6号人骨が最終埋葬であることは疑いない。次に、3号人骨→4号人骨あるいは大腿骨⑩の成人男性→5号人骨という順位も得られている。また、1号人骨の後に2号人骨という順位も明らかであり、2号をさらに片付ける必要が生じたとする5号人骨を埋葬する際であろう。さらに、6号を埋葬する際に通路を確保する必要から、5号人骨の体部骨を片付けたと推察される。

したがって、1号→3号→4号もしくは大腿骨⑩の成人男性→5号→6号という順位が得られ、2号は1号と5号の間のいずれかの時期に葬られたと考えられる。そして、これを土器との関係でいえば、須恵器大甕は初葬時に副葬され、1号人骨とともに片付けられたと考えられる。また、これと同時期の器台は、本来は5号人骨近くの礎床上にあったものが、5号人骨体部骨の片付けの際に、玄室左側へと動かされたという解釈ができる。玄室中央部奥の礎も、本来は玄室左側の被葬者に伴うものを、5号人骨埋葬時に再利用した可能性が強い。

しかし、以上の推察は、玄室中央部には5号・6号の2体しか葬られなかったことを前提にしたものである。ところが、さらにもう1体が埋葬されていた可能性がある。というのも、玄室中央部の直刀と礎床との間に、取り上げ不能であったものの、四肢骨片が検出されたからである。5号人骨の四肢骨は玄室左側へと片付けられたとすると、この四肢骨片の所属はどの被葬者にも求められなくなる。また、上ノ原横穴墓群で直刀を伴う被葬者のほとんどが、切先を足元に向け、刃を外側に向けていることを考慮すると、この直刀は6号人骨ではなく、所属不明の四肢骨片から推測される「もう1体」に伴うことも考えられるのである。しかし、これについては確証に乏しいため、可能性の指摘に止めるべきであろう。(田中良之)

#### b) 副葬品

玄室内からは多量の遺物が出土している。

須恵器には、奥壁中央に礎1(第212図10)、北東隅よりやや手前に器台1(第212図13)、南東隅に甕1(第212図12)、南西隅に提振1(第212図11)が認められる。鉄器には鉄鏃57、直刀4、馬具4、矢筒金具1がある。鉄鏃は北壁中央部、同北西隅近く、南壁南東隅近く、同中央部付近、同南西隅近くの都合5箇所に集中分布が認められる。馬具は玄室北西隅に、矢筒金具は奥壁右側から出土している。直刀は玄室北寄り部分、中央部、南壁からそれぞれ1本出土しており、各々切先を羨門側、奥壁側、羨門側に向けている。玄室中央部から出土した直刀には鏃金具が付属している。また玄室南東隅より砥石が1点出土している。

最後に、遺物と人骨の関係を以下略述しておく。玄室南壁の直刀は1号人骨に、中央部の銅金具を持つ直刀および提瓶は6号人骨に、玄室右寄りの直刀は3号人骨に、小刀は5号人骨にそれぞれ帰属する。また須恵器器台、甕は人骨上に置かれており、原位置を遊離したものであるが、甕は本来1号人骨に伴うものであろう。題も5号人骨の枕にされたような状況を示しており、やはり当初の位置から遊離したものであろう。

## 2) 前庭部内

前庭部内埋土中より、土器の小破片が出土している。うちわけは須恵器器台の口縁部3、高坏口縁部2、同胴部1、器種不明1、土師器の小片1が出土している。本横穴墓は追葬により数度に渡って墓道埋土の形成がみられることや土器がまとまった接合をなさないことから、追葬時の攪乱と思われる。(吉田 寛)

## 4. 35号横穴墓出土人骨の所見

奥壁に向かって右側の人骨群から成人骨が2体分、左側の人骨群からは成人3体分と小児骨1体分、さらに中央部近くに成人1体分、合計7体分の人骨が識別された。

### [右側人骨群]

比較的保存の良い二組の大腿骨はどちらも男性のものであり、二つの頭蓋骨も男性のものであって矛盾はない。さらにこれらと比較すると、それぞれに特徴があり、筋附着部の発達が著しいものと、それ程でもないものにと識別される。このような形質の特徴や位置関係を考慮し、右側人骨群は2体の人骨に分類することが出来た。右壁寄りから1号、2号である。

### [左側人骨群]

左側人骨群からは、比較的保存の良い成人の大腿骨3対が識別できた。頭蓋骨片は、頭蓋冠片3体分(1体分は明らかに小児のもの)、成人の下顎骨2体分が識別できた。したがって、左側人骨群には少なくとも成人3体、小児1体の計4体分が含まれていることになる。右側人骨群と同様に、それぞれの骨について個体識別を試みた結果、対応関係がある程度推測できるものもあるが、大半のものは所属を決めることが困難であった。そこで、左側人骨群は便宜的に頭蓋冠をもって左側より3号、4号、5号人骨とした。

### [中央部人骨]

1対の大腿骨が識別された。この人骨に所属すると思われる頭蓋骨は見当たらないが、本人骨を6号とした。以下に各人骨についての所見を示す。

## 35-1号人骨(男性・成年)

### 〈保存部位〉

頭蓋骨：前頭骨片、頭頂骨片、左上顎骨片、下顎骨、歯牙16本。赤色顔料の付着が認められる。残存歯牙は以下のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ M_3 & M_2 & M_1 & P_2 & P_1 & C & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc}   & I^1 & C & P^1 & P^2 & / & / & / \\ / & / & C & P_1 & P_2 & M_1 & M_2 & M_3 \end{array}$
--	--

/ 破損・不明

体部骨：左上腕骨体部、右橈骨片、左右大腿骨体部、左右胫骨体部。

### 〈性別・年齢の推定〉

性別：側頭線が発達し、下顎骨も頑丈である。また、四肢骨の形状も男性と考えると矛盾しない。

年齢：歯牙咬耗度はBrocaの1～2度、冠状縫合は内・外板ともにほぼ分離していることから、成年(30代位)と推定した。



〈性別・年齢の推定〉

性別：外後頭隆起の発達やその他の形状から男性と考えられる。

年齢：冠状縫合は内板がほぼ閉鎖し、外板は開離している。矢状縫合は内板が閉鎖し、外板もかなり閉鎖している。ラムダ縫合は内板・外板ともかなりの部分が開離している。以上の所見から本人骨の年齢はほぼ熟年に達した程度と推定される。

〈形質〉

頭蓋非計測的形質で上矢状溝左傾が認められた。その他の詳細は不明である。

35—6号人骨（男性・成人）

〈保存部位〉

左右の大腿骨体部片と識別不能の四肢骨細片少量が検出された。

〈性別・年齢の推定〉

性別：骨質はもろいがかなり厚く、筋付着部も発達していたと思われることから男性と推定した。

年齢：骨片のサイズから成人には達していたと考えられるが、それ以上の推定は不可能である。

[所属不明人骨片]

左側人骨群には、かなりの所属不明骨が残っている。主要なものを以下に記す。

(1)下顎骨

大腿骨の近くから出土している。頑丈で明らかに男性のものである。5号人骨に属する可能性もあるが、左側人骨群には大腿骨の数や形状から推定して3体の男性が含まれると考えられることから、別個体の可能性も残る。歯式を以下に示す。

/ / / / / / / / / / / / / / / /		/ / / / / / / / / / / / / / / /
M <sub>3</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> ○ ○ C ○ ○		? ○ C P <sub>1</sub> P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub> M <sub>3</sub>

○ 歯槽開放    / 破損・不明    ? 不明

下顎切歯の歯槽は3個しか認められない。歯槽骨の形態から中切歯の先天的欠如の可能性が強い。

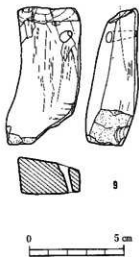
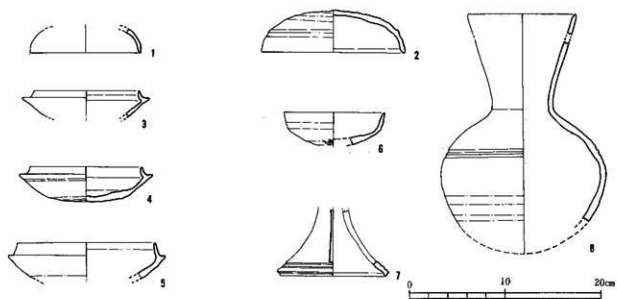
(2)大腿骨

3号人骨のもの以外に2対の大腿骨が識別され、いずれも男性のもので推定される。左壁寄りの方がより頑丈である。

(3)脛骨

大腿骨と同様に、所属不明の脛骨が2対識別できる。どちらも男性と推定して矛盾はないが、大腿骨との対応を推定するほどの情報は得られなかった。また、左壁寄りのものには足関節部に病変が認められた。(土肥直美)

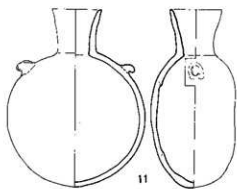




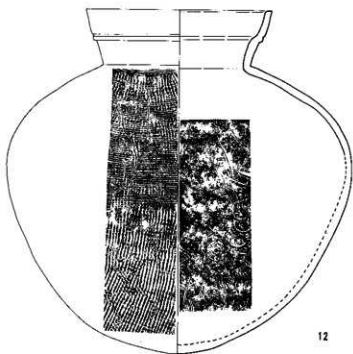
第211图 35号横穴墓出土遗物实测图(1)



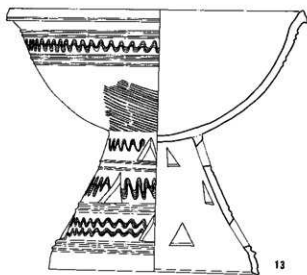
10



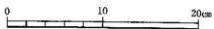
11

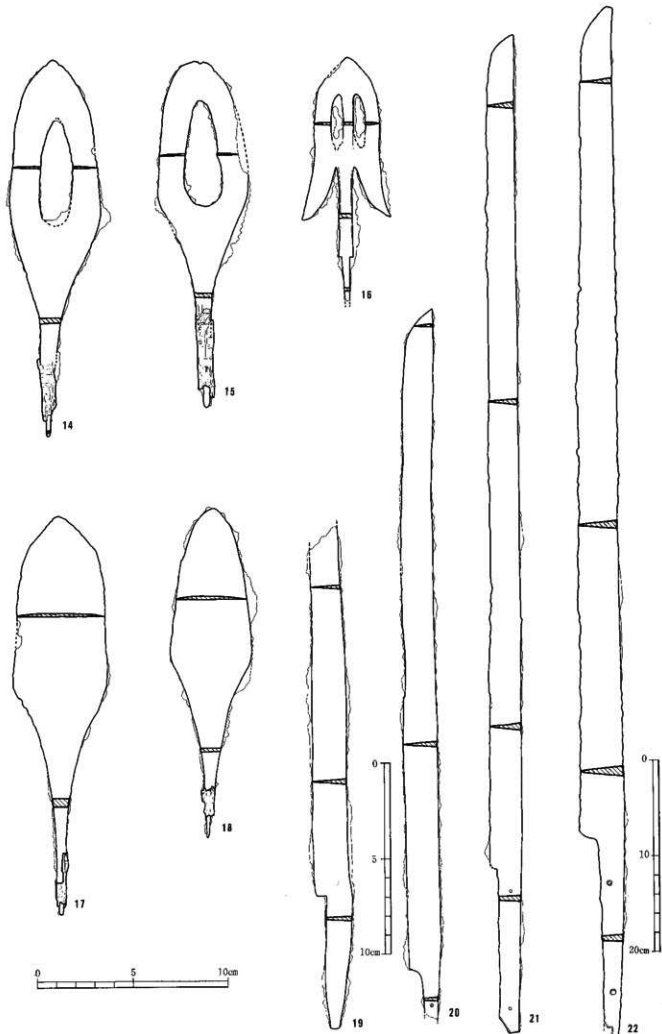


12

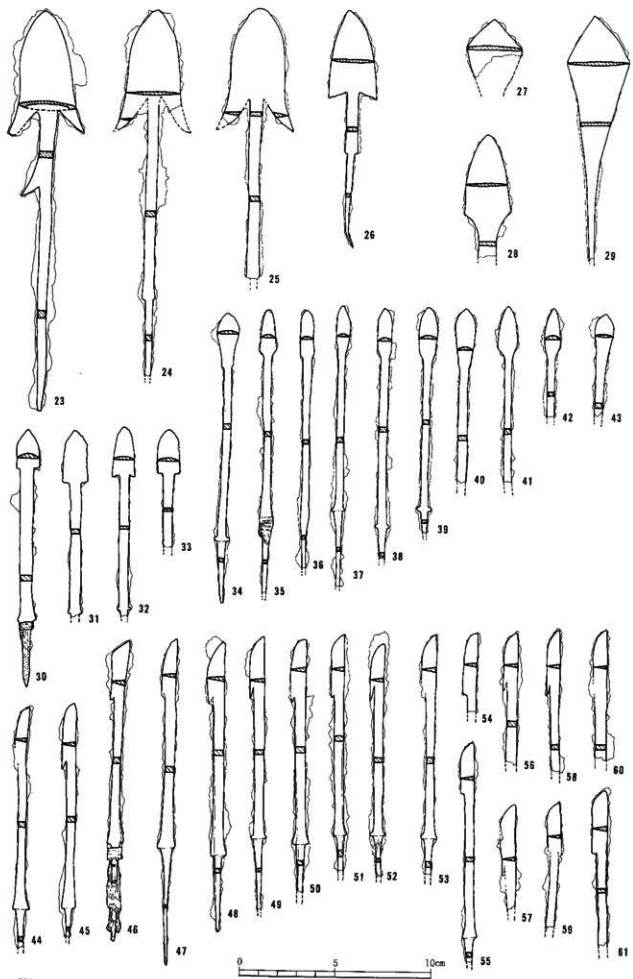


13

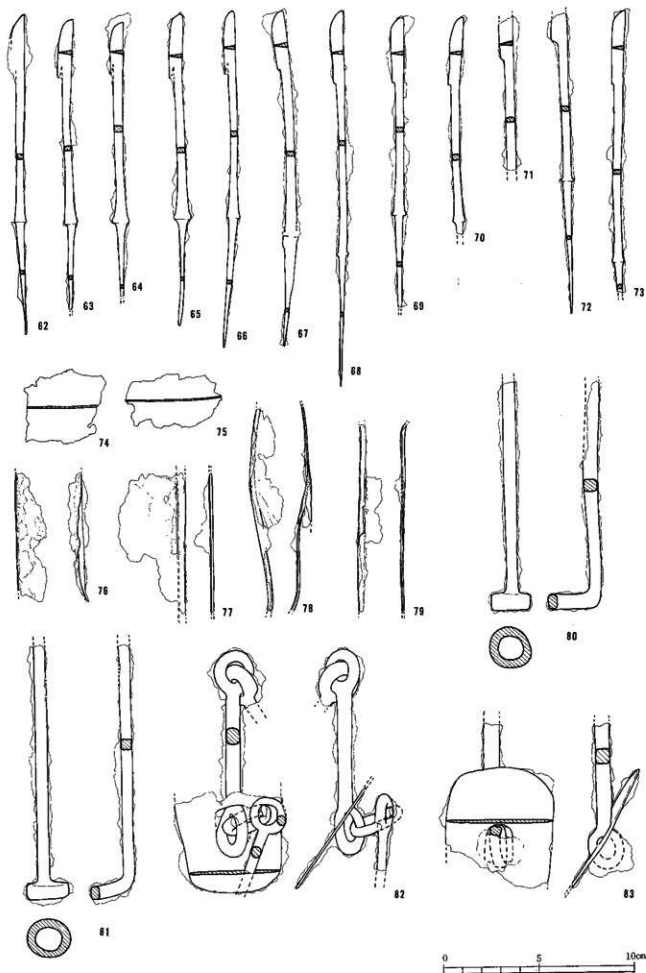




第213图 35号横穴墓出土遗物实测图(3)



第214图 35号横穴墓出土遗物实测图(4)



第215图 35号横穴墓出土遗物实测图(5)

第79表 35号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・11.8 ・2.4+α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	2~3mmの石英粒を含む	良好 堅緻	反転復元	
2	坏蓋	・15.1 ・4.4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には縁がうすくみられる。天井はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	2~3mm大の石英粒を含む	良好 堅緻		
3	坏身	・11.3 ・2.5+α ・13.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を含む	良好		
4	坏身	・11.6 ・3.6 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英微砂粒 黒色砂粒を微量に含む が精緻	良好		
5	坏身	・14.4 ・3.8 ・16.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	石英微砂粒 黒色砂粒を含む が精緻	良好	反転復元	
6	高坏	・— ・7+α ・—	脚部は下方に朝顔状に開き、三方向に長方形のスカシが認められる。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
7	高坏	・10.8 ・3+α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
8	長頸壺	・8.7 ・21.3 ・16.6	口頸部は直立してのび、端部は丸い。胴部はよくはり最大径は中心部にある。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を微量に含む が精緻	良好 堅緻		
10	甕	・9.2 ・10.4 ・9.9	口縁部は外反しながらのび、さらに外方に屈曲し、屈曲面に2本の沈線をなす。胴部はよくはり、最大径は中心部で、その上方に1本の沈線がある。中央部に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ 後1事なナデ	灰黒色	石英粒を含む が精緻	良好		
11	提瓶	・5.5 ・18.8 ・14.4	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は円形を呈し、両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	精緻	良好		
12	壺	・19.4 ・35.8 ・36.2	口縁部は外反しながらのび、半分くらいでさらに外反し、その外面に一本の沈線をなす。端部は圓をなす。胴部はよくはり、最大径は上方にある。底部は丸い。	回転ナデ 同心円のタタキをすり消す	回転ナデ タタキ+回転カキ目	青灰色	長石、石英粒を含む	良好		
13	壺台	・30.7 ・27.3 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は面をなし面の下方に一本の沈線を施す。外面には4本の突帯がある。脚部は下方外にのび外面3か所に2本ずつの突帯があり、端部は内傾する面をなす。三角形スカシが三段にわたってある。	ナデ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色	長石、石英粒を含む	良好		

第80表 35号横穴墓出土鉄器観察表

(単位:cm)

番号	器 種	全 長	頸部長 (刀部)	刃 幅	頸 幅	刃部厚	頸 厚	備 考
14	鉄鏃	19.8	13.5	4.7	1.1	0.2	0.3	透根桜樹皮巻残存
15	同上	18.3	12.1	4.7	1.0	0.1	0.3	同上
16	同上	12.8以上	8.4	3.5	0.7	0.2	0.3	同上
17	同上	21.0	14.8	4.9	1.0	0.2	0.5	桜樹皮巻残存
18	同上	16.2	12.6	4.2	1.0	0.2	0.25	同上
19	小刀	26.2以上	19.4以上	1.6	1.4	0.3	0.35	
20	直刀	74.2以上	69.0	3.6	2.0	0.6	0.4	目釘穴有り
21	同上	104.6	87.6	3.4	2.4	0.8	0.6	目釘穴2個
22	同上	108.6	86.6	4.6	2.6	1.0	0.6	同上
23	鉄鏃	20.9	6.4	3.0	0.8			
24	同上	19.1以上	6.3	2.9	0.6	0.1	0.3	
25	同上	14.1以上	6.3	2.9	0.6	0.2	0.3	
26	同上	12.5	4.4	2.5	0.6		0.2	
27	同上	3.0以上	3.0以上	2.9	全し	0.2	全し	
28	同上	6.4以上	4.2	2.4	0.9	0.1	0.2	
29	同上	12.7以上	5.5	3.2	1.5	0.2	0.2	
30	同上	13.5	2.0	1.2	0.7	0.3	0.3	木質残存
31	同上	9.7以上	2.7	1.3	0.5		0.2	
32	同上	10.0以上	2.6	1.2	0.5	0.15	0.2	
33	同上	6.0以上	2.3	1.2	0.5	0.2	0.15	
34	同上	15.2	2.8	1.1	0.4	0.2	0.2	
35	同上	14.8以上	2.2	0.8	0.4	0.2	0.25	桜樹皮巻残存
36	同上	13.5以上	2.4	0.7	0.4	0.2	0.2	
37	同上	14.7以上	2.4	0.7	0.4	0.2	0.3	
38	同上	13.1以上	2.5	0.7	0.4	0.2	0.3	
39	同上	11.8以上	2.5	1.0	0.5	0.2	0.2	
40	同上	9.0以上	3.0	1.0	0.5	0.2	0.3	
41	同上	9.1以上	2.4	1.0	0.4		0.3	
42	同上	5.6以上	2.3	0.8	0.4	0.25	0.2	
43	同上	5.3以上	2.2	1.0	0.4	0.1	0.3	
44	同上	3.7以上	3.3	0.6	0.4	0.2	0.3	
45	同上	12.2以上	3.4	0.7	0.4	0.2	0.3	
46	同上	15.7以上	3.0	0.9	0.4	0.3	0.3	
47	同上	17.2	3.0	0.7	0.5	0.2	0.3	
48	同上	15.2	3.1	0.9	0.5	0.2	0.3	
49	同上	14.3以上	3.1	0.8	0.5	0.2	0.2	
50	同上	13.2以上	3.1	0.8	0.5	0.2	0.3	
51	同上	12.4以上	3.2	0.7	0.4	0.2	0.3	
52	同上	12.2以上	3.0	0.7	0.4	0.2	0.2	木質残存

番号	器種	全長	刃部長 (刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
53	鉄鏃	12.5以上	3.0	0.7	0.4	0.2	0.3	
54	同上	4.1以上	3.2	0.7	0.4	0.2		
55	同上	11.5以上	2.6	0.7	0.5	0.2	0.2	
56	同上	7.0以上	3.0	0.7	0.5	0.2	0.3	
57	同上	5.5以上	3.5	0.7	0.5	0.2		
58	同上	7.4以上	3.4	0.7	0.4	0.2	0.25	
59	同上	6.5以上	不明	0.7	0.4	0.1		
60	同上	6.9以上	不明	0.7	0.5	0.2	0.4	
61	同上	8.0以上	3.1	0.7	0.4	0.2	0.2	
62	同上	16.8	3.0	0.7	0.4		0.3	
63	同上	15.2以上	3.0	0.7	0.4	0.2	0.3	
64	同上	14.4以上	2.6	0.7	0.4	0.2	0.3	
65	同上	16.3	3.4	0.7	0.4	0.2	0.3	
66	同上	17.6	3.2	0.6	0.4	0.2	0.3	
67	同上	17.5	3.0	0.8	0.5	0.2	0.2	
68	同上	19.6	3.8	0.7	0.3	0.2	0.3	
69	同上	15.0以上	3.5	0.7	0.4	0.2	0.2	
70	同上	11.3以上	3.5	0.7	0.4	0.2	0.2	
71	同上	8.0以上	2.0以上	0.7	0.4	0.2	0.2	
72	同上	15.7以上	1.5以上	0.8	0.4		0.3	
73	同上	14.7以上	3.9	0.6	0.4	0.2	0.3	
74	欠筒金具(一部)							
75	同上							
76	同上							
77	同上							
78	同上							
79	同上							
80	馬具							轡の一部(引手)
81	同上							轡の一部(引手)
82	同上							轡
83	同上							轡

第81表 35号横穴墓出土石器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	幅	厚さ	石質	備考
9	砥石	7.2	3.1	1.9	頁岩	先端部に穿孔あり



## 36号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

36号は北支群中央からやや南寄りの斜面にあり、南西方向に開口する。主軸方向はN-56.5°-Eを測る。標高は36.2mを測る。全長は12.2mを測り、保存状態は比較的良好であった。斜面の遺構検出作業中に本横穴墓の墓道埋土の最上層風化土層が検出され、発見の契機となった。調査以前には横穴墓の存在を示すような墓道の落ち込み等は認められなかった。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物、礎床施設等の調査を実施した。

### 2. 規模、構造

#### 1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約8.9m、幅約1.6mであり、羨門部に向かって拡がる平面形を呈している。羨門部前面から0.7m付近まで、一段高い造り出し部をもうけている。長さ約0.7m、幅約1.6mで長方形の平面プランを持つ。羨道部とは段差は無いが、墓道の約0.7m以後とは6cm前後の段差を有する。中央部を玄室内から延びる排水溝によって切られている。墓道床面は若干の凹凸があるものの全体にはほぼ平坦であり、約5~10°の傾斜で裾部方向へ下降している。側壁の傾斜は両者ともほぼ同様で70°を測る。

羨門部分は入口天井部分が崩壊しているが、全体的に残りは良好である。羨門部は高さ0.7m、幅0.55mを測る。また羨門部壁の傾斜は約80°である。

閉塞施設は数度の追葬のためほとんど残存していないが現状でみると板石と河原円礫、地山円礫を使用している。板石は玄室~墓道間にも敷き詰めており、前庭部前面までの一連の行為であり、閉塞施設とは言い難い部分もある。まず床面に10cm前後の埋土を行い、その上部に板石を設置する。河原円礫は羨門部を覆う安山岩板石の支えに使用したと考えられる状況で検出された。河原円礫2個と地山包含円礫4個で、羨門部前面を囲むように配置されている。なお羨門部を覆ったと思われる安山岩板石2枚は、墓道埋土中より検出された。

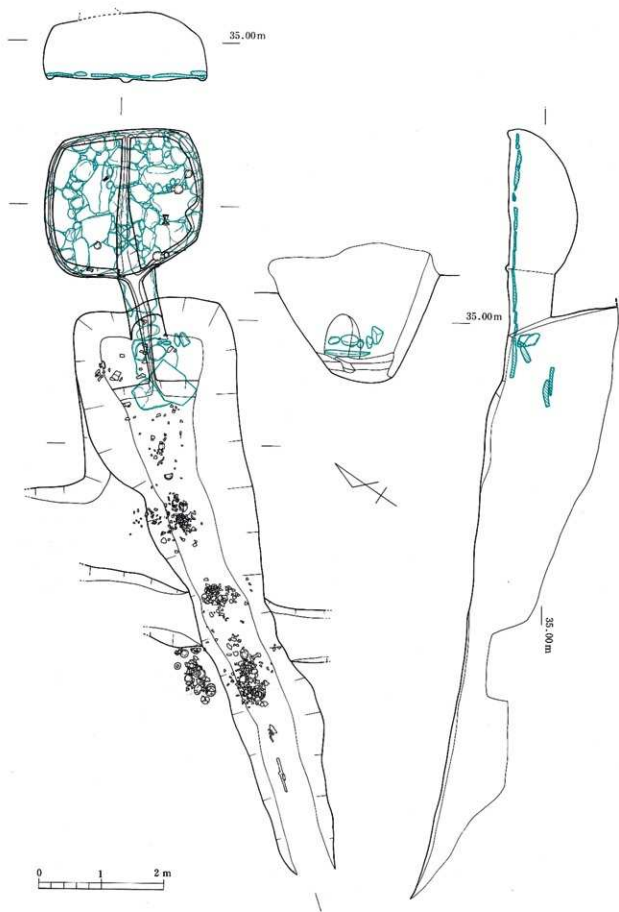
b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土はその性状から比較的良好な層区分が可能であり、全体で6層群16層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群 (X層) は、墓道掘削時及び墓道形成直後に床面に堆積した基盤層の二次堆積土層であり、羨門部前面から約3.5m付近まで続いている。最大20cm程の層厚がある。

第2層群 (Ⅷ・Ⅸ層) は、下位層群に類似した性状を示し、羨門部前面より約1m程から、下位層を覆って堆積している。本層群はさらに2層に細分される。下層は粘質土層で若干の風化がみられる。羨門部前面より6~7m付近において、上面から炭化材と焼土層が検出された。この部分は上層から掘り望めた形跡はみうけられないため、この部分で火が焚かれ、これが完全に燃え尽きないうちに基盤層の二次堆積物である上層によって覆われたものと考えられる。この上層は下層に比べやや暗色であり、風化がみられる。下層とは漸移層をなす。本層群は初葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (Ⅵ・Ⅶ層) は、閉塞施設を覆い隠す様に堆積している。羨門部前面から約3mまではほぼ平坦で、それ以後約10~30°の傾斜で下降して斜面に至る。本層群は2層に細分される。下層は粘質で地山礫片を包含する。下層とは整合面をなす。上層は羨門部前面から3m付近に遺物の集中する地域を検出した。下層と比較して若干風化が進んでいる。本層群は2度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第4層群 (Ⅳ・Ⅴ層) は羨門部全面の前庭部をほぼ覆うように堆積している。この層群中からは羨門部を覆うために使用されたと考えられる安山岩板石が2枚、羨門部前面より約0.8m、標高35m付近で検出された。この時点の埋葬時に閉塞石が抜き取られ、その板石を使用することなく廃棄されたものと考えられる。羨門部前面から約6m付近に遺物の一括廃棄部分が検出された。本層群は3度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。



第216图 36号横穴墓平·断面图

第5層群(Ⅱ・Ⅲ層)は、粘質土層であり地山小礫を包含する。墓道の最終埋土であろう。

第6層群(Ⅵ～ⅩⅥ層)は、墓道のはは中央部を南北に走る溝の土層であり、本横穴墓に付随するものではない。本層群は6層に細分される。下面の2層は砂質土層である。

## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.55m、長さ1.04mを測る。床面は5°前後の緩い傾斜で玄室に向かって下降し、玄室との接続部分で最深となる。天井部は玄室に向かって約5°の傾きで上昇している。このため玄室との接続部分で羨道の高さは最高となり0.75mを測る。羨道内から玄室にかけては羨門部を覆う閉塞施設が除去されていたため、多量の流入土が堆積していた。玄室はドーム形、略方形を呈し、長さ2.27m、幅2.52mを測る。高さは最大で1.08mを測る。天井部は一部分上面からの破壊はうけているもののほとんど崩落もなく、比較的良好な残存状態であった。奥壁北方向には、玄室形成時に使用したノミ痕が鮮やかに確認できた。床面には全面に大形の安山岩板石を敷きつめ、その隙間を埋めるように20cm前後の河原円礫を敷いている。さらにその隙間を5～10cm前後の河原円礫や地山礫で埋めている。この状況は玄室だけではなく羨道から前庭部前面までみうけられる。敷石の下面には5cm前後の埋土を行っている。最終床面は標高34.45m前後ではほぼ平坦に成形している。また幅10～20cmの排水溝が、玄室壁寄りと中央に附設され、さらに羨道から前庭部まで続いている。

## 3) テラス状遺構

横穴墓前庭部前面から約5m付近に斜面に沿って約10°の傾斜で浅い掘り込みが認められた。整形に直行する土層観察が不十分なため盛土などの存在は不明である。テラス状遺構からは土師器が一括埋置の状況で検出された。

### 3. 遺物の出土状態

#### 1) 玄室内

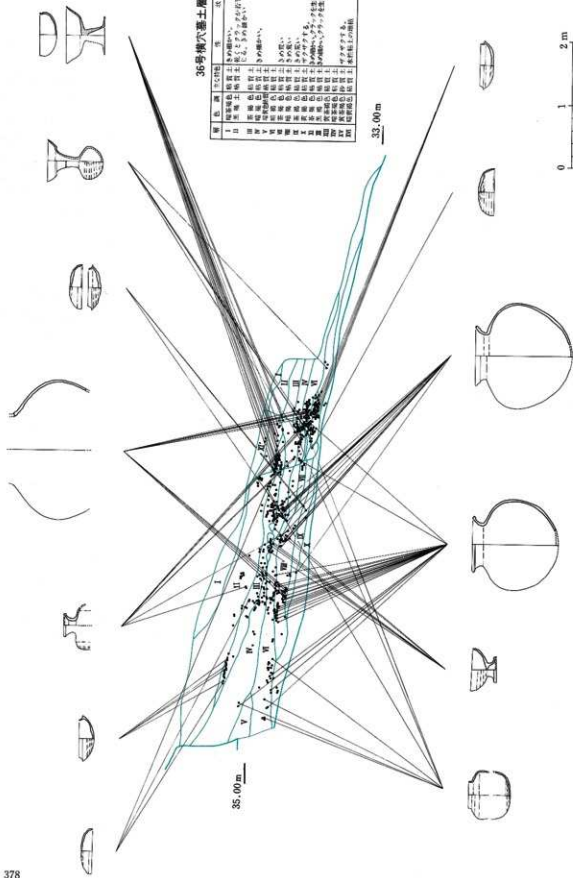
玄室内には須恵器、土師器、鉄製品が検出された。須恵器は高坏1(第221図62)・提瓶4(第221図59・63～65)・罎蓋1(第221図60)で、土師器は高坏1(第221図61)の合計7点である。そのほとんどが玄室壁に沿って検出された。鉄製品は土壌洗浄中に検出されたものも含めて、19点であった。内訳は鉄鏃13・刀子2・馬具4である。鉄鏃は玄室中央部分や奥壁寄りに3点まとまって検出された。先端を南東方向に向けている。敷石の直上である。これ以外の鉄鏃、刀子は壁沿いに巡っている排水溝内からの検出である。馬具は玄室と羨道の接続部分の左端に1、羨道部入口付近に1それぞれ検出された。

#### 2) 墓道内

墓道内埋土ではほぼ全面から遺物が検出されたが、3ヶ所集中的に検出される地点がみうけられた。A群は羨門部前面から前庭部斜面方向へ3m程の位置である。0.5×0.7mのほぼだ円形の範囲で遺物群が出土した。標高は34.4～34.6mを測る。埋土を掘り込んだ状況は検出できなかった。出土遺物は須恵器で坏(第219図21～34)・甕・高坏(第219図37)等が検出された。いわゆる破砕散布の状態である。B群はA群から斜面方向へ1.3m程度行った位置で0.6×0.4mのだ円形の範囲で遺物群が検出された。出土遺物は須恵器片で坏(第219図47・48)・甕等である。C群はB群よりさらに1.4m程西の方向である。1.0×0.6mの範囲で完形の坏(第219図39～46・49～51)や甕(第220図52)など相当量の須恵器が検出された。いわゆる一括埋置の様相を示す。

#### 3) テラス状遺構

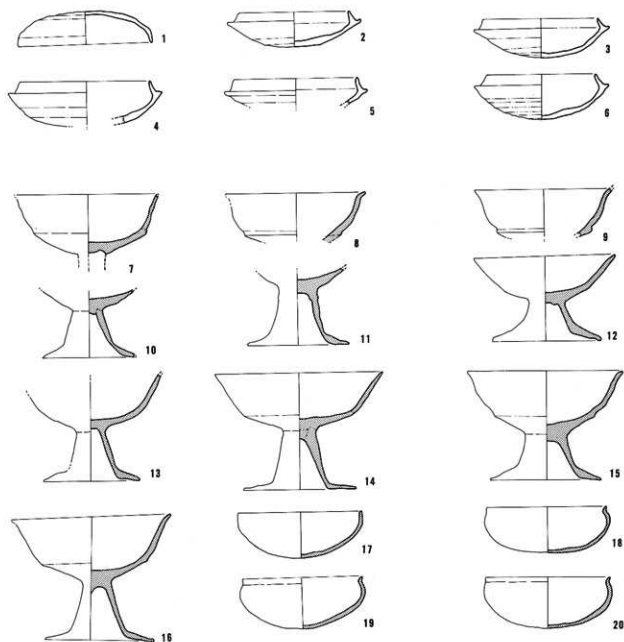
本来このテラス状遺構は35号横穴墓の遺構であり、本横穴墓に伴うものではない。しかし遺物が墓道左側部分より出土していたため、本横穴墓の出土遺物としてとりあつかう。テラス状遺構からは土師器が一括して多量に出土した。1.0×0.4mの範囲に2列に並べた状態で、いわゆる配列埋置の状況である。土師器は破片も含めて坏6(第218図17～20)、高坏10(第218図7～16)個体であった。標高は34.40～34.60mの範囲である。(友岡信彦)



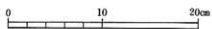
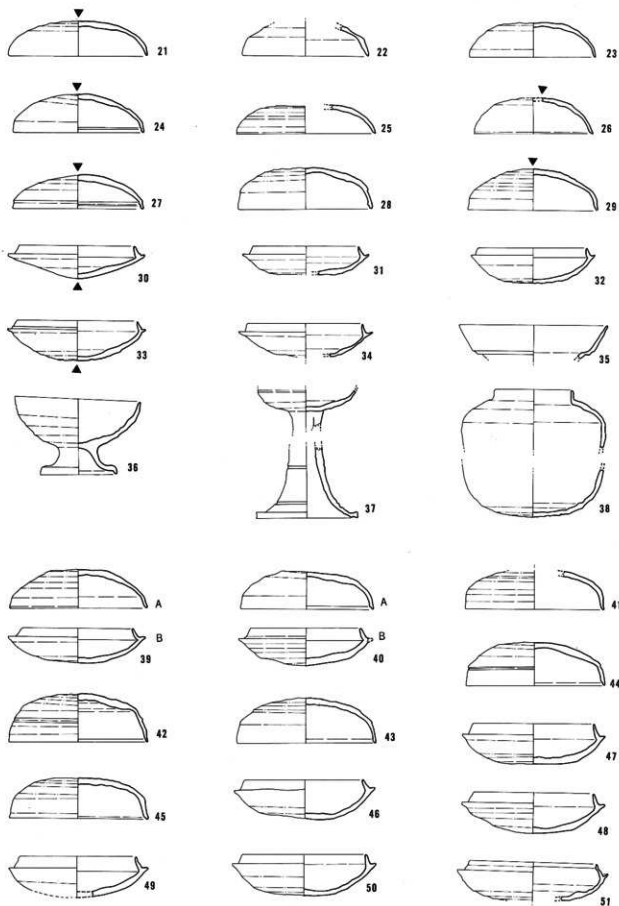
36号横穴墓土層別表

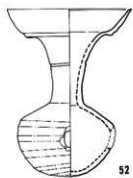
層別	土層	色	質	厚	特徴
1	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
2	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
3	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
4	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
5	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
6	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
7	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
8	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
9	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
10	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
11	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
12	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
13	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
14	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
15	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
16	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
17	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
18	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
19	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
20	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
21	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
22	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
23	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
24	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
25	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
26	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
27	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
28	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
29	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
30	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
31	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
32	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
33	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
34	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
35	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
36	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
37	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
38	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
39	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
40	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
41	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
42	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
43	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
44	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
45	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
46	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
47	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
48	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
49	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層
50	埋土	黒褐色	粘質	30cm	埋土層

第217図 36号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第218図 36号横穴墓出土遺物実測図(1)





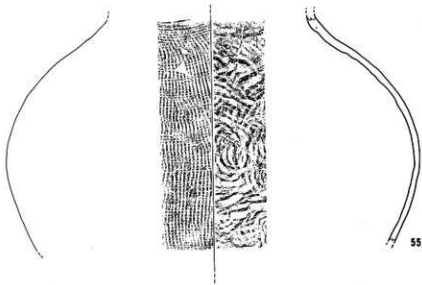
52



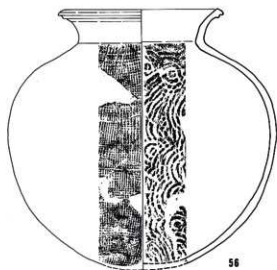
53



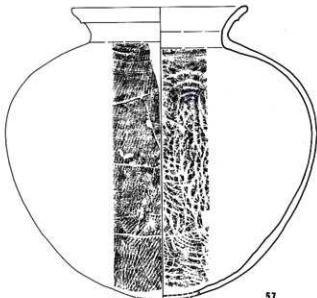
54



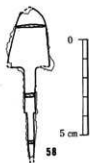
55



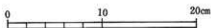
56



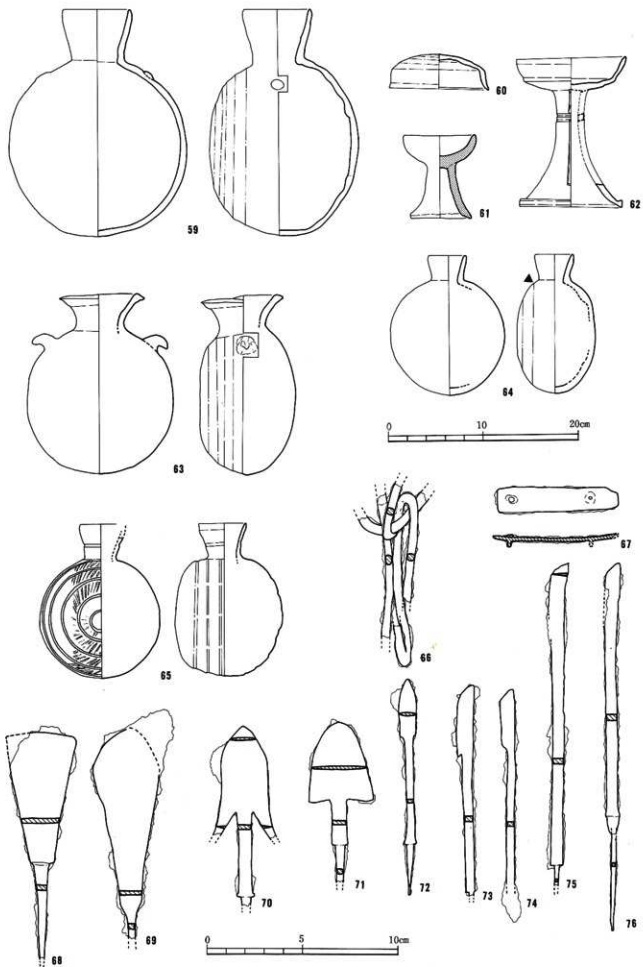
57



58



第220图 36号横穴墓出土遗物实测图(3)





第82表 36号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・13.8 ・3.4 ・—	口縁部は外反しながら直下のび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~25mmの 白色砂粒、 黒色砂粒を やや多量に 含む	良好		
2	坏身	・11.6 ・3.6 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上方にのび、端部は丸くわずかに肥厚している。底部は浅く、やや平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡緑褐色	1~4mmの 白色砂粒を 微量含む	良好		
3	坏身	・12 ・4.1 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~4mmの 白色砂粒を やや多量に 含む	良好		
4	坏身	・13.6 ・4.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は肥厚しながら水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 黒青灰色	1~3.5mm の白色砂粒 を多量に含 む	良好		
5	坏身	・12.8 ・2.7+α ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色	石英粒を含む が精緻	良好	反転復元	
6	坏身	・11.6 ・4.7 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒灰色	1~6mmの 白色砂粒を やや多量に 含む	良好		
7	高坏	・15.2 ・6+α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は細くなる。	調整不明	調整不明	明茶褐色	2~5mm大 の石英、長 石粒を多量 に含む 1cm大の砂 粒を含む	良好	土師器 坏部	
8	高坏	・14.8 ・5+α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部付近で、外方に肥厚し端部は丸い。外面には、稜がみとめられる。	調整不明	調整不明	明褐色	0.5~3mm の石英粒を 多量に含む	良好	土師器 坏部	
9	高坏	・— ・7+α ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、はっきりとした稜がみられる。	調整不明	調整不明	明褐色	0.5~3mm の石英粒を 少量含む 雲母微砂粒 を少量含む	良好	土師器 坏部	
10	高坏	・— ・— ・—	脚部は下外方にのび、端部付近でさらに外反する。端部は丸い。	調整不明	ナデ 指オサエ	明褐色	1mm~3mm の石英粒を 多量に含む 角閃石、雲 母微砂粒を 少量含む	良好	土師器	
11	高坏	・— ・6+α ・—	脚部は下外方にのび、端部付近でさらに外反する。端部は丸い。	調整不明	調整不明	明褐色	1mm~3mm の石英粒を 多量に含む	良好	土師器	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
12	高坏	・14.8 ・8.9 ・一	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部付近でさらに屈曲し丸い。	調整不明 指オサエ	ヘラズケリ 指オサエ	明橙色	1mm~3mmの石英粒を多量に含む。角閃石、雲母粒を少量含む	良好	土師器	
13	高坏	・一 ・11+ $\alpha$ ・一	坏部は外反しながらのびる。脚部は下外方にのび、端部付近でさらに外反し、端部は丸い。	調整不明	調整不明	明橙色	1mm~3mmの石英粒を多量に含む。雲母の微細粒を少量含む。	良好	土師器	
14	高坏	・17.6 ・12.2 ・一	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部はとがりぎみ。脚部は、下外方にのび、端部は水平に屈曲し丸い。	調整不明	調整不明	明茶褐色	2.5~5mm大の石英、長石砂粒を多量に含む。1.2cm大の砂粒を3個含む	良好	土師器 風化している	
15	高坏	・16.8 ・11.4 ・一	坏部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、丸い徒がみとめられる。脚部は、短く下外方にのび、端部はさらに外反し丸い。	調整不明	調整不明	明橙色	1mm~4mmの石英粒を多量に含む。雲母微砂粒を少量含む	不良	土師器	
16	高坏	・16.8 ・12.9 ・一	坏部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には、稜がうすくみられる。脚部は下外方にのび、端部付近でさらに外反し丸い。	調整不明	調整不明	明橙色	1mm~3mmの石英粒を多量に含む。雲母の微細粒を少量含む	不良	土師器	
17	埴	・13 ・4.8 ・一	口縁部はわずかに内湾しながらのび、端部は丸い。底部は、やや深く丸みをおびる。	調整不明	調整不明	明橙色	1~3.5mmの石英粒を多量に含む	不良	土師器 風化している	
18	埴	・12.6 ・4.8 ・一	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で外反し丸い。底部は、やや深く平ら。	調整不明	調整不明	明橙色	1mm~4mmの石英粒を多量に含む		土師器	
19	埴	・12.5 ・5.4 ・一	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で、外反し丸い。底部は深く丸みをおびる。	調整不明	調整不明	赤褐色	1mm~3mmの石英粒を多量に含む	不良	土師器	
20	埴	・13 ・5.3 ・一	口縁部は内湾しながらのび、端部付近で、外反し丸い。底部は深く丸みをおびる。	調整不明	調整不明	赤褐色	1mm~3mmの石英粒を多量に含む	不良	土師器	
21	坏蓋	・14.2 ・3.6 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 青灰色	1mm前後の白色砂粒、黑色砂粒を少量含む	やや不良		外面天井部「ハ」
22	坏蓋	・15.6 ・残存高 3.4+ $\alpha$ ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	白色砂粒 石英粒を含む			

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
23	坏蓋	・13 ・3.5 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 白青灰色 灰色	1—1.5mm の白色砂粒 を少量含む	やや不良		
24	坏蓋	・13.6 ・4 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸く、内面にうすい沈線を施す。天井部はやや高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色	石英粒を含む	良好		外面天井部 「H」
25	坏蓋	・14.6 ・2.9+ ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は内傾する面をなす。天井部は低く平らである。	調整不明	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰紫色	石英粒を含む	良好	反転復元	
26	坏蓋	・12.4 ・3.7+ ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は内傾する面をなす。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色 青灰色	1.5mm前後 の白色砂粒 を微量含む	良好	反転復元	外面天井部 「O」
27	坏蓋	・13.5 ・3.5 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部に行くにつれてわずかに屈曲し、長く内傾する段を有す。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡青灰色	精緻	良好 堅緻		外面天井部 「I」
28	坏蓋	・14 ・4.2 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は内傾する面を有す。天井部は高く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 黒青灰色 暗紫灰色	1—4mm の白色砂粒を やや多量に 含む	良好		
29	坏蓋	・13.5 ・4.3 ・—	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色 黒褐色	1mm前後 の白色砂粒が ごく微量	良好		外面天井部 端「A」
30	坏身	・12.1 ・3.5 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は浅くとりぎみである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡青灰色 灰色	精緻	良好 堅緻		外面底部 「II」
31	坏身	・11 ・2.9 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	青灰色 黒青灰色	1—3.5mm の白色砂粒 を多量に 含む	良好	反転復元	
32	坏身	・11.4 ・3.6 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡青灰色	細かい石英 粒を多量に 含む	良好	反転復元	
33	坏身	・12.6 ・4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は細く、ほぼ水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡紫灰色 淡黄灰色	細砂粒を含む	良好		内面底部 「X」
34	坏身	・12 ・3.5+ ・—	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりさみ。受部は上外方にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	灰色	細かい石英 粒を含む	良好	反転復元	
35	甌	・15.6 ・3.5+ ・—	口縁部は外反しなからのび、端部付近でさらに外反し、外面に凹面をなす。端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 黒灰色	石英粒を含む	良好		
36	脚付 碗	・13.3 ・7.8 ・—	坏部は外反しなからのび、端部は丸い。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナズリ	淡青灰色	石英粒を多 量に含む	不良		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	粘土	焼成		
37	高坏	・10 ・11+ ・-	坏部は、上外方にのびる。脚部は下外方にのび、端部は面をなす。外面に2本の沈線あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒灰色	石英粒を多量に含む	良好		
38	短頸壺	・8.2 ・11.2+ ・15	口縁部は直立してのび、端部は丸い。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ヘラケズリ	淡青灰色	細砂粒5mmほどの石英粒を含む	良好		
39   A	坏蓋	・14.3 ・4.1 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平ら。	調整ナデ 回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 調整ナデ	灰白褐色	やや粗	不良		
39   B	坏身	・11.6 ・3.6 ・-	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰白色	精緻	不良		
40   A	坏蓋	・13.8 ・3.9 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段(面)を有す。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色 黒灰色	精緻	良好 堅緻		
40   B	坏身	・11.5 ・4 ・-	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび端部は丸い。底部はやや浅く丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 灰黒色	黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
41	坏蓋	・14.4 ・4+ ・-	口縁部はほぼ直下にのび、端部は丸い。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡紫灰色	白色砂粒 黒色砂粒を含む	良好	反転復元	
42	坏蓋	・14.5 ・5 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は丸く、内面に沈線を描す。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1-6mmの白色砂粒を多量に含む	良好		
43	坏蓋	・14.5 ・4.7 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部はわずかに、内傾する面をなす。天井部はやや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 暗青灰色 暗紫灰色	1-3mmの白色砂粒をやや多量に含む	良好 堅緻		
44	坏蓋	・14.4 ・4.5 ・-	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部はやや高く丸みをおびる。外面には棱がみられる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 淡紫褐色 灰色	黒色砂粒を含むが精緻	良好 堅緻		
45	坏蓋	・14.6 ・4.2 ・-	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸く、内傾する面を有す。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5-2.5mmの石英粒をやや多量に含む	良好		
46	坏身	・12.4 ・3.9 ・-	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は、やや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	明青灰色	1-2mmの白色砂粒を含む	良好		
47	坏身	・12.6 ・4.2 ・-	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く、丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ、へう切り未調整	淡青灰色 褐色 暗青灰色	精緻	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
48	坏身	・12.5 ・4.2 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は、やや深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 淡紫褐色	精緻	良好 堅緻		
49	坏身	・12.3 ・4.3 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、ほぼ水平にのび端部は丸い。底部は、深く丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ ヘラ切り後 回転ヘラケズリ	灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻	底部欠損	
50	坏身	・12.3 ・4.3 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く、丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 白青灰色	1-3mmの 石英粒を含む	良好 堅緻		
51	坏身	・13.4 ・4 ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は、内傾する凹面をなす。受部は、上外方にのび端部は丸い。底部は浅く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を多量に含む	良好		
52	罎	・13.1 ・17.4 ・10.2	口頸部は外反しなからのび、端部付近で、さらに外反しその外面に沈線をなす。端部は段をなす。胴部は、ほぼ円形を呈し、中央部にだ円状の穿孔をなす。底部は丸みをおびる。	回転ナデ	回転ヘラケズリ	淡白色 暗灰色	石英粒を多量に含む	良好		
53	有蓋高外	・10.8 ・8.4 ・—	坏部のたちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。胴部は下外方にのび端部は面をなし、その中に2本の沈線がある。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 淡青灰色	2-3mmの 砂粒を含む	良好		
54	横瓶	・6.7 ・8.3+ $\alpha$ ・12.5+ $\alpha$	口頸部は外反しなからのび、端部はやや肥厚し、面をなす。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ 回転カキ目	淡灰色 淡黄灰色	石英粒を多量に含む	良好	口縁胴部の半分以上は自然釉がかり灰黒色を呈する。	
55	甕	・— ・23.5+ $\alpha$ ・—	胴部はほぼ円形を呈し、胴部最大径は中位にある。	回転ナデ 同心円のタタキ	タタキ目	青灰色	0.5mm前後の 石英粒を含むが精緻	良好		
56	甕	・17.4 ・27.5 ・28	口頸部は外反しなからのび、端部は、面をなし、外面に凹面をなす。胴部はほぼ、円形を呈す。	回転ナデ 同心円タタキ	回転ナデ タタキ調整	白灰黄色	2mm大の石英、角閃石色砂粒を少量含む	不良		
57	甕	・14.5(復元) ・32.8(復元) ・30.6(復元)	口頸部は外反しなからのび、端部は肥厚し段をなし、丸い。胴部最大径は、やや上方にある。底部は、ややとがりきみ。	同心円タタキ 回転ナデ	タタキ調整後、 回転カキ目調整	灰白色	砂粒を少量含む	やや良好		
59	提瓶	・7 ・23.5 ・18.6	口頸部は外反しなからのび、端部は丸い。胴部は、円形を呈し、両肩に浮文がつく。	回転ナデ ナデ	回転ナデ 回転カキ目 側面に一部 回転ヘラケズリ	赤紫色がか った灰色淡 青灰色	細砂粒を多量に含む	良好 堅緻	外面、自然釉がみられる	

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
60	埴蓋	・10.4 ・3.6 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面をなす。天井部は高く、丸みをおびる。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗灰色	2-7mm大の石英粒をやや多量に含む	良好堅緻		
61	高坏	・7.4 ・8.5 ・一	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は下方外にのび、端部は丸く、わずかに内傾する面をなす。	ナデ後ヘラによる平滑仕上げ 胴内面—ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ 細く丁寧なヘラミガキ	明黄褐色	石英、雲母粒を含む	良好堅緻		
62	高坏	・11.4 ・15.5 ・一	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面には丸みをおびた後がみとられる。胴部は長く、下方外にのび、端部は垂直な面をなす。外面基部付近に、2本の沈線がある。長方形二段スカシあり。	回転ナデ調整ナデ	回転ナデ ヘラケズリ後ナデ	暗青灰色	石英、磁砂粒を含むが精緻	良好堅緻		
63	提瓶	・9 ・18.5 ・15.4	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は、円形を呈し、両側に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ カキ目	灰色	石英粒を含む	良好堅緻		
64	提瓶	・4.1 ・14.4 ・12.1	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は、円形を呈す。	回転ナデ	回転ナデ カキ目、ヘラケズリ後ナデ	灰黒色 鉄分、カルシウム付着のため茶色を呈す	精緻	良好堅緻		外面胴部上方「A」
65	提瓶	・5 ・16.1 ・12.5	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。外面中央部に沈線を施す。胴部は円形を呈す。	回転ナデ	回転カキ目 浅い沈線間に備書文	灰~灰黒色	石英粒を多量に含む	良好堅緻		

第83表 36号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頸部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
58	鉄鏃	7.8以上	3.2	2.1	0.5	0.1	0.2	
66	馬具							兵器類
67	同上							U字形金具の一部
68	鉄鏃	11.8以上	6.7	3.4	0.7	0.2	0.3	
69	同上	11.0	9.3	3.4	0.4	0.2	0.3	
70	同上	9.4以上	6.0	2.6	0.7	0.1	0.25	
71	同上	8.3以上	4.0	3.2	0.7	0.15	0.2	
72	同上	11.3	3.0	0.9	0.4	0.15	0.2	
73	同上	11.0以上	3.8	不明	0.5	不明	0.3	
74	同上	11.0以上	3.1	不明	0.45	不明	0.25	
75	同上	17.0以上	不明	0.8	0.65	0.15	0.3	木質残存
76	同上	19.3	不明	不明	0.6	不明	0.3	

## 37号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

37号は北支群中央からやや南寄りの斜面にあり、南西方向に開口する。主軸方向はN-49.5°-Eに取る。標高は約33.1mを測る。全長は3.5mを測り、保存状態はよくなかった。調査以前から玄室天井部の陥没が認められ、横穴墓の存在が確認されていた。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の有無の確認、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の落石土等の埋土除去作業を行い、遺物・礎床施設等の調査を実施した。

### 2. 規模、構造

#### 1) 前庭部、羨門部

a) 規模、構造 前庭部は長さ約1.8m、幅約1.2mであり、ほぼ長方形の平面形を呈している。前庭部床面はゆるい凹凸があり、羨道部前面の0.9m付近から斜面方向へは約20°の傾斜で斜面に向かって下降している。0.9m付近から羨門部前面までは、ほぼ平坦となる。前庭部前面からは約50°の傾斜で急激に下降し、羨門部に達する。側壁の傾斜は両者に差異があり、50~60°を測る。

羨門部分は特に天井部分と側壁部において崩壊が著しく、旧状を大きく損なっている。側壁下部が一部残存しているだけであり、復元は困難である。

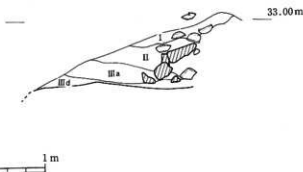
閉塞施設は板石と河原円礫を使用し、入念に構築されている。前庭部の下部に5cm前後の埋土を行い、閉塞の基底部を整えている。閉塞の配石は形状と使用部位によって次の2群に分けられる。第1群は、大型の扁平河原石を1枚、平坦面を上にして先の埋土の上に敷き、さらに羨道部分にも大型の扁平河原石を1枚敷いている。その上に安山岩板石を4枚使用して、羨道部を覆う。一枚は基底部の河原石上に倒れており、追葬時に引き倒されたものと思われる。第2群は人頭大の河原円礫多数と、地山小礫からなり、第1群を支え、隙間を覆う。以上の配石によって面積・堆積と共におよそ前庭部の半分が埋まる。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土壌はその性状から比較的に明瞭な層区分が可能であり、全体で2層群4層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

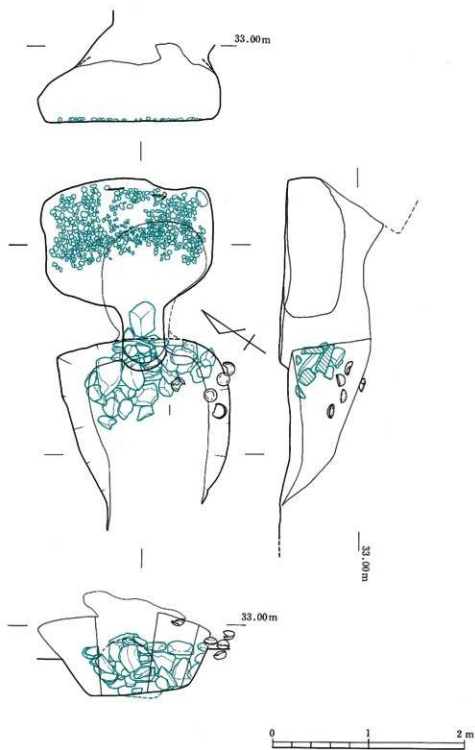
第1層群(Ⅲa・b層)は、初葬時の前庭部内の埋土と考えられる。墓道の全面に堆積しており、羨道部に向かって約10°の傾斜で下降している。本層群は2層に細分される。上層は下層に比べ若干暗色であり基盤層礫を多量に含んでいる。下層とは漸移的に堆積する。

37号横穴墓土層観察表

層	色調	主な特色	性状	評価・解釈
I	茶褐色	粘質土	地山礫を多量に含む。 (埋土の最層)	追葬時の墓道埋土
II	茶褐色 I層よりやや 暗色	粘質土	地山礫を多量に含む。	最終埋葬土
Ⅲa	黄茶褐色	粘質土	地山礫を多量に含む。	追葬埋土
Ⅲb	黄茶褐色	粘質土	やや砂質気味。	初葬埋土

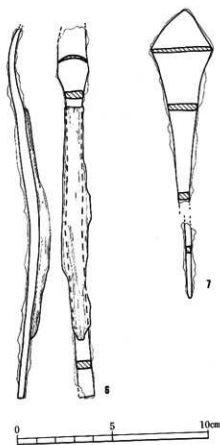
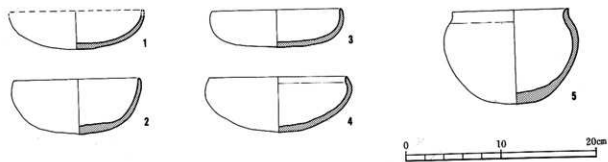


第222図 37号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図



第223图 37号横穴墓平·断面图





第224图 37号横穴墓出土物实测图

第2層群（Ⅰ・Ⅱ層）は、追葬時の前庭部内埋土と考えられる。第1層群を切り込むように羨道部に向かって下降しており、閉塞施設及び第1層群を覆って堆積している。本層群も2層に細分される。上層上面は一部風化している。下層は閉塞施設を覆うように堆積し、上層とは整合面をなす。供献土器の出土がみられるのは本層である。

## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.43m、長さ0.42mを測る。床面はほぼ平坦で、前庭部と接する部分に約10cmの段差を持つ。天井部は崩落によって不明である。

玄室は天井部分の崩落のため高さは不明であるが、ドーム形を呈すと推定される。長さ1.33m、幅1.8mで略長方形を呈す。床面は奥壁に向かって約7°の傾斜で上昇している。玄室奥壁部分には長さ約1.7m、幅0.8mの範囲で直径5cmの河原円礫を散布し、礫床としている。なお礫床南側奥壁添いに比較的大きな円礫があり石枕とした可能性がある。

## 3. 遺物の出土状態

### 1) 玄室内

玄室内には奥壁寄り礫床端に鉢1、鉄鏝1点がそれぞれ検出された。鉢・鉄鏝とも先端を南に向けている。玄室天井部は崩壊し、流入土が厚く堆積していたため、原位置を保っているとは考えにくい。

### 2) 前庭部内

前庭部内埋土上面で土師器を配列埋置状態で検出した。羨門に向かって右側の前庭部壁寄りの上面に位置する。前庭部を一部埋め戻し後、この埋置がなされた可能性がある。土師器は鉢1・埴4である。（友岡信彦）

第84表 37号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色				備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土		
1	埴	・14+α ・4 ・-	口縁部は外反しなからのびる。端部は欠損している。底部は浅くやや丸みをおびる。	ナデ	ナデ	赤褐色	石英、長石の細粒を少量含む	良好 やや軟質	土師器 反転復元 器面が磨滅しているため、調整不明
2	埴	・13 ・5.7 ・13.3	口縁部は外反しなからのび、端部は丸い。底部は深くやや平らである。	ナデ	ナデ	赤褐色	石英、角閃石粒を含む	良好	土師器 器面が磨滅しているため、調整不明
3	埴	・13.6 ・3.8 ・14.1	口縁部は外反しなから上方にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	ナデ	ナデ	赤褐色	石英、長石の細粒を少量含む	良好 やや軟質	土師器 器面が磨滅しているため、調整不明
4	埴	・14.5 ・5.8 ・15.4	口縁部は内湾しなからのび、端部は内傾ぎみにのびて丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	ナデ	ナデ	赤褐色	石英、長石の細粒を少量含む	良好 軟質	土師器 器面が磨滅しているため調整不明
5	鉢	・12.3 ・9.9 ・14.2	口頸部は外反しなからのび、端部は細くなり、ややとがりぎみ。胴部は丸みを呈すが、底部は平らである。	ナデ	ナデ 指オサエ	赤褐色	角閃石、長石、石英の微細粒を含む	良好	土師器

第85表 37号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	型式名	全長	頭部長(刀部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頭厚	備考
6	鉞	19.4以上	3.2	1.5	0.9	0.3	0.3	
7	鉄鏝	15.0以上	5.0	3.2	0.6	0.2	0.3	

## 38号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

38号横穴墓は北支那南寄りの斜面に立地し、南西方向に開口する。全長は9.3mで標高は墓道前部の上場で、35.4m前後を測る。主軸方向はN-56.5°-Eを測る。保存状態は墓道が中世の溝で切られていたり、削平を受けていたりして、必ずしも良好とは言えない。斜面の遺構検出作業中に本横穴墓の供献土器群及び堆積埋土が検出され、発見の契機となった。調査以前には横穴墓の存在を示すような墓道の落ち込みや天井部の陥没等は認められなかった。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物、礎床施設等の調査を実施した。

### 2. 規模、構造

#### 1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 前底部は長さ約6.4m、幅は墓道前面で約2.2mを測る。墓道入口から2m程手前で最小幅を取る。約1.6mである。その後入口に向って拡がる傾向にある。前底部床面はゆるい凹凸はあるもののほぼ平坦に整形されている。床面傾斜は羨門部前面から約1mまでは約10°の傾斜で下降し、同1~2m付近においては一旦平坦となり、同2m付近で再度約10°の傾斜で下降し入口に至る。側壁の傾斜は両者とも約80°でほとんど差異はない。また羨門部壁の傾斜は約80°を測る。

羨門部分は全体の残りが良く旧状とほとんど大差ない。羨門部は高さ約0.8m、幅約0.5mを測る。

閉塞施設は板石と河原円礫、地山礫を使用し、ごく簡単に構築されている。床面には閉塞施設構築以前の玄室内から続く敷石が附設されている。この敷石を根石としてまず安山岩板石が2枚羨門部を覆っている。板石を支えるよう20cm前後の円礫3個を検出した。閉塞施設の検出は以上であり、最終埋葬時にはごく簡単な閉塞施設だったということがうかがわれる。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は墓道中軸線で土層が切れていなかったため、途中で中軸線を設定しなおした。このため墓道肩部をやや切り込んだ部分がみうけられた。よって1部分見通しで土層図を作成した。この二重に記録した層を差し引くと5層群15層に分層できた。以下堆積順に説明を加える。

第1層群 (X I・X II層) は、床面のほぼ全面に堆積する。羨門部付近は追葬時に整地されていて、約15cm程度の層厚を持つ。下面は基盤層を利用した埋土であり、層厚は10cm前後を測る。上層は墓道前面に堆積していて、最大厚で25cm前後を測るが、羨門部付近は整地されていて、ほとんど残存しない。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

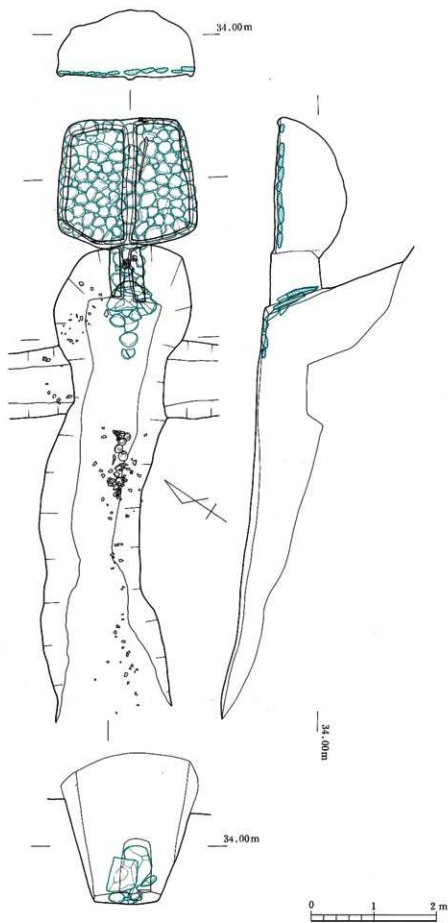
第2層群 (II・V-X層) は、羨門部壁上面から下層群を覆って堆積している。本層群の埋土堆積状況は、まず閉塞石前面は礫を含む粘質の埋土で閉塞石を固定する。その後二次、三次と埋土を繰り返している。本層群中より遺物の出土がみられた。本層群を最終埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (III・IV層) は、最終埋葬時後に堆積した二次堆積土と推定している。上層群によって切られているため、中世以前の埋土と推定している。

第4層群 (X III-X V層) は、墓道を南北に走る中世の溝跡の堆積埋土であり、本横穴墓に付随する土層群ではない。水が流れたと思われる堆積の状況がうかがわれる。

第5層群 (I層) は、後世の二次堆積土であり、本横穴墓の墓道内埋土ではないと推定している。

本横穴墓は土層観察の結果、2層群が横穴墓埋土に伴うものと確かめられた。人骨の検出もなく、これ以上の土層の切り合いも確かめることは不可能であった。この結果最低2回の埋葬行為が行われたと推定している。



第225图 38号横穴墓平·断面图

## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅約0.52m、長さ0.9mを測る。床面は排水溝を覆うように扁平河原円礫を、玄室寄りの部分に敷きつめている。羨門部寄りには安山岩板石を2枚重ねて敷いている。敷石除去後は玄室より続く排水溝が検出された。この排水溝は中央部に位置し、羨門部で排水溝下場と墓道床面レベルが同一となる。床面は約6°の傾斜で玄室へ向って下降する。天井部も残りが良く、約6°の傾斜で玄室へ向って下降する。

玄室は天井部の崩落が見とめられるもののドーム形を呈している。高さは復元による推定であるが、1m前後であろう。長さ約2m、幅約2.2mで略方形を呈している。床面は全面に扁平な河原円礫を敷きつめている。しかし他の横穴墓玄室と違い、本横穴墓玄室敷石には、隙間を補填する小型の礫はみられない。敷石除去後の床面は標高33.3m前後ではほぼ平坦である。玄室壁沿い及び中央を縦断するように幅20cm前後の排水溝が検出された。これが玄室入口付近で1条となり羨門部まで続く。次に排水溝と敷石の関係であるが、敷石の重なり具合・配列等からみて排水溝構築後、敷石はまず排水溝だけを覆って敷かれその後、排水溝間相互の隙間に敷石を敷いたと推定している。この傾向は羨道から墓道前面にまで続く。

## 3. 遺物の出土状態

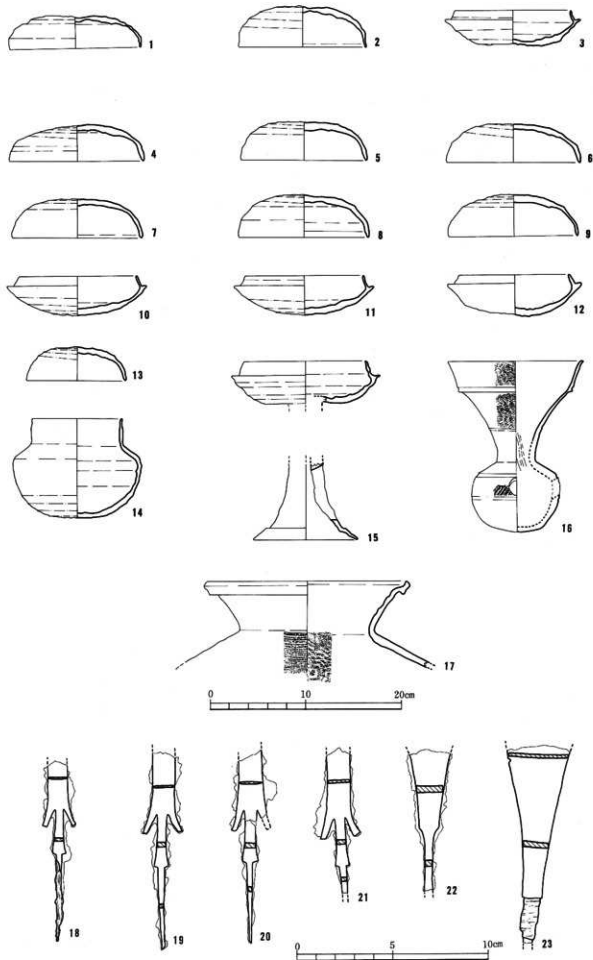
### 1) 玄室、羨道内

玄室からは鉄鏝8・刀子1・直刀1振が検出された。鉄鏝は奥壁沿いの中央やや南寄りから4本が1群となって検出された。先端は北を向いている。さらに羨道部から玄室に入った直後の左手前壁沿いに、ほぼ等間隔で鉄鏝が4本検出された。先端は左端の1本を除き残り3本は南南西向きであった。直刀は奥壁沿いの鉄鏝1群から約20cm羨道部寄りて検出された。刀先は西向きで刃部は北向きであった。直刀の北寄りて刀子が1点検出された。羨道中央部分では馬具の轡部分が1対検出された。

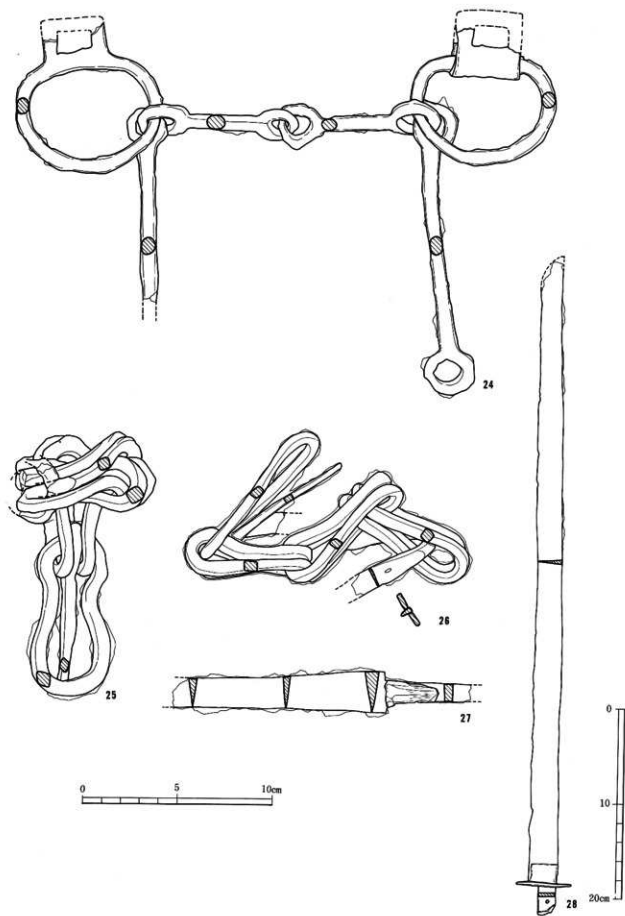
### 2) 墓道内

墓道内埋土からは第2層群より多量の遺物が検出された。そのほとんどが破片であり旧埋土中の遺物だと推定しているが、1ヶ所羨門部から入口へ向って2～3mの範囲内で集中して遺物の出土する地点がみうけられた。標高は33.3m前後である。この一帯からは坏蓋7(第227図4～9・13)・坏身4(第227図10～12)・甕(第227図16)・甕口縁部(第227図17)等が完形及び破片で検出された。検出状況でみると、坏等は配列埋置の状態で出土したと推定される。この地点以外には遺物の集中する地点はみられない。なお本横穴墓出土の須恵器甕・坏蓋の破片が、39号テラス状遺構出土の破片と接合関係にある。(友岡信彦)





第227图 38号横穴墓出土器物实测图(1)





第86表 38号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へら記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・13.8 ・3.3 ・一	口縁部は外反しながらほぼ直下 にのび、肩部は丸い。天井部は、 低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰黒色一灰 黄色	2mmほどの 白色砂粒を 多量に含む	良好 堅緻		
2	坏蓋	・13.5 ・4.3 ・一	口縁部は外反しながらほぼ直下 にのび、肩部は丸く、内面に一 本の沈線をなす。天井部は、や や高く、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	2~3mmの 砂粒を含む	良好 堅緻		
3	坏身	・12.3 ・3.5 ・14.3	たちあがりは内傾してのび、端 部は丸い。受部は上外方にのび、 肩部は丸い。底部は、浅く平ら である。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケ ズリ	淡青灰色	石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		
4	坏蓋	・14.1 ・3.7 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸い。天井部はやや高く、 丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多 量に含む 角閃石粒を 微量含む	良好 堅緻		
5	坏蓋	・13.4 ・4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸い。天井部は、やや高く 丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好		
6	坏蓋	・14.2 ・4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸い。天井部は、やや高く 平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	0.5mm前後 の白色砂粒 を少量含む	良好		
7	坏蓋	・13.6 ・4.1 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部はやや肥厚し丸い。天井部は、 やや高く丸みをおびる。	磨滅のため 調整不明	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	黒色粒含み やや粗い	不良		外面天井部 「1」
8	坏蓋	・13.7 ・4.5 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸く、内面は、やや肥厚す る。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多 量に含む	良好 堅緻		
9	坏蓋	・13.7 ・4.4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸い。天井部は、やや高く 丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 頂部未調整	青灰色	0.5mm前後 の白色砂粒 を少量含む	良好		
10	坏身	・12.3 ・4.2 ・14.6	たちあがりは内傾してのび、端 部は丸い。受部は、水平にのび 肩部は丸い。底部は浅く丸みを おびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	石英、黒色 砂粒を含む	良好 堅緻		
11	坏身	・12.4 ・4.1 ・14.7	たちあがりは内傾してのび、端 部は丸い。受部は、やや肥厚し、 肩部は丸い。底部は、やや浅く、 丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、黒色 砂粒を多量 に含む	良好 堅緻		
12	坏身	・11.8 ・4.1 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端 部は丸い。受部は、ほぼ水平に のび、肩部は丸い。底部は浅く、 やや丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 青紫灰色	0.5~3mm の白色砂粒 を多量に含 む	良好		
13	坏蓋	・10.4 ・3.5 ・一	口縁部は外反しながらのび、端 部は丸い。天井部は高く丸みを おびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	淡青灰色	黒色砂粒、 石英粒含む	良好		

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
14	短頸壺	・9.4 ・10.9 ・13	口頸部は短く直立してのび、肩部は丸い。胴部は、だ円形を呈し最大径は上方にある。底部は、丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラナゲリ	暗赤紫色	石英粒を多量に含む	良好		
15	有蓋高坏	・12.8 ・19+α ・15.6	たちあがりは内傾してのび、肩部は丸い。受部は、ほぼ水平ののび、肩部は丸い。坏部は、やや深い。脚部は、下方へののび、肩部付近で、さらに外へ屈曲し丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目 回転ナデ	灰色	1～2mmの石英粒を含む	良好	脚部上方欠損	
16	甗	・14.3 ・17.8 ・9.3	口頸部は、外反しながらのび、肩部付近で屈曲し、外面はやや肥厚し、その部分に沈線を描す。胴部は、内傾する面をなす。外面中心部にうすい沈線あり。胴部は円形を呈し、中心部に穿孔があり、外面に2本の沈線がある。	回転ナデ	液状文 回転ナデ 回転カキ目	青灰色	0.5mm前後の白砂粒を少量含む	良好		
17	甗	・20.7 ・10+α ・-	口頸部は、外反しながらのび、肩部は屈曲し、面をなす。	回転ナデ 同心門のタタキ	回転ナデ 回転カキ目 平行タタキ	灰色	精緻	良好		

第87表 38号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器 種	全 長	胴部長 (刀部)	刃 幅	頸 幅	刃部厚	頸 厚	備 考
18	鉄鏃	9.4以上	3.4以上	1.0	0.5	0.15	0.2	木質残存
19	同上	10.3以上	4.3以上	1.2	0.5	0.15	0.3	
20	同上	10.1以上	4.3以上	1.3	0.6	0.15	0.3	
21	同上	7.6以上	4.7以上	1.15	0.5	0.15	0.25	
22	同上	7.4以上	4.6以上	2.1以上	0.45	0.3	0.35	
23	同上	10.3以上	8.0以上	3.2以上	0.55	0.3		桜樹皮巻き残存
24	馬具							骨
25	同上							銃具と兵車痕
26	同上							鏃頭
27	刀子	14.6以上	11.2以上	1.6	1.0	0.3	0.4	木質残存
28	直刀	66.4以上	65.2以上	2.6	1.8	0.2	0.2	目釘穴1個、鏝有

## 39号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

39号は北支群中央からやや南寄りの斜面にあり、南西方向に開口する。標高は約32.4mを測る。全長は3.65mを測り、玄室主軸方向は、N-56.5°-Eを測る。保存状態は比較的良好であった。斜面の遺構検出作業中に本横穴墓前庭部内埋土の最上層風化土層が検出され、発見の契機となった。調査前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込み、玄室天井部の陥没などの状況は認められなかった。調査は供献土器群の検出作業を進めつつ、順次前庭部プランの確認、同埋土の検討、横穴墓上の「テラス状遺構」の検出、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礎床施設等の調査を実施した。

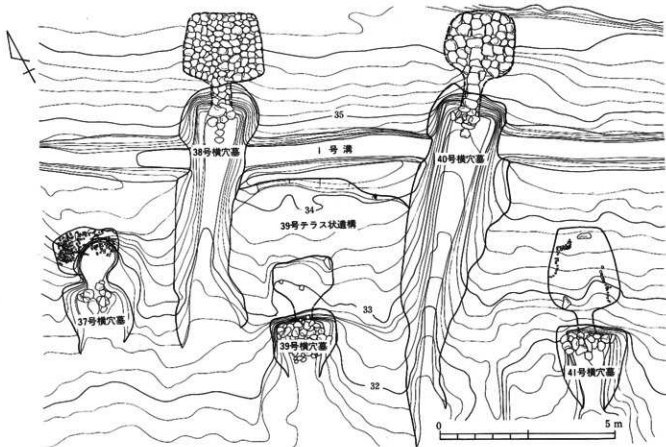
### 2. 規模、構造

#### 1) 前庭部、羨門部

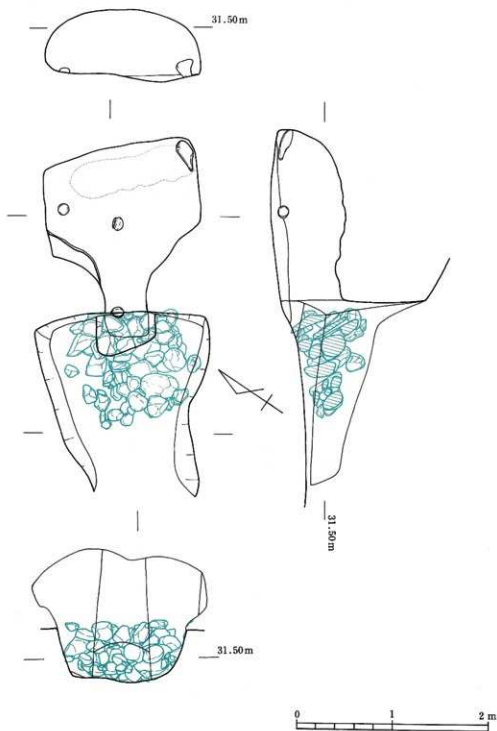
a) 規模、構造 前庭部は長さ約1.9m、幅約1.6mであり、羨道部に向かって広がる平面形を呈している。前庭部の斜面下方は旧地表と推定される風化土層であり、前庭部掘削に先立っての地山整形は少なくともこの部分では行われていない。前庭部床面は緩い凹凸があるものの、全体にはほぼ平坦である。羨門部前面の0.3m付近から約20°の傾斜で下降し、羨門部に達する。側壁の傾斜は両者に差異があり、60~70°を測る。

羨門部分は天井部分が若干崩壊しているが全体の残りは良くほぼ旧状を留めている。羨門部は高さ0.65m、幅0.43mを測る。また羨門部壁の傾斜は約80°である。

閉塞施設は板石と地山円礫を使用し、入念に構築されている。まず前庭部の下部に若干の埋土を行い閉塞の基底部を整えている。閉塞の配列は形状と使用部位によって次の4群に分けられる。第1群は直径10~20cm前後の円礫を10個平坦面を上にして羨門部分を囲むように半円形に並べ埋土に埋めこむ。第2群は安山岩板石が2枚



第229図 39号横穴墓テラス平面図



第230图 39号横穴墓平・断面图

であり、第1群を根石とし羨門部を覆う。第3群は直径20cm以上の大型円礫を主体とし、第2群を支え隙間を覆う。第4群はさらに第2、第3群の隙間を覆うように直径10-20cm前後の円礫を用いている。以上の配石によって前庭部は面積、堆積共におよそ半分が埋まる。この配石の後に前庭部全体を覆うように埋土がなされている。

b) 前庭部内埋土 前庭部内の堆積土はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で3層群6層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群 (V・VI層) は、前庭部の斜面下方に堆積する。旧地表と推定され、黒褐色の風化土層が堆積している。埋葬時にこの部分にも埋土がなされたものと考えられる。

第2層群 (II・III・IV層) は、埋葬時の埋土と推定される。IV層は閉塞施設を半分覆うように堆積している。III層はIV層を覆うように閉塞施設及び羨門部を含む前庭部全面に堆積している。II層とも地山土で漸移面をなす。II層は黒褐色の風化土層で下層全面を覆っている。やはり下層とは漸移面をなしている。

第3層群は前庭部全面を覆うように堆積している。地山土で構成されている。3) で触れるテラス状遺構の埋土と類似しており、墳丘土の可能性もある。下層とは整合面をなす。

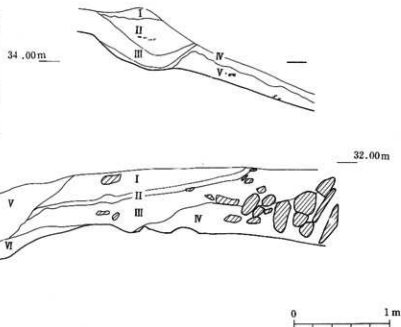
## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.43m、長さ0.35mを測る。床面は5°前後の緩い傾斜で玄室に向けて下降する。天井部は若干崩落しているが、約6°の傾斜で下降すると推定される。

玄室はドーム形、略長方形を呈し、長さ2.14m、幅2.45mを測る。高さは天井部の崩落のために明確ではないが、約0.75mと推定される。床面は標高31mでほぼ平坦であるが、中央部分は約0.1m程掘り込まれている。その部分に小砂利混じりの土を埋土として、平坦に整形している。玄室奥壁添いに長さ1.4m、幅0.4mの範囲で直径1-2cm前後の小砂利を敷きつめ礫床としている。礫床の南側奥壁添いに、長さ30cm、幅15cm程の河原石を配置しており、石枕としている。

39号横穴墓土層観察表

層	色	調	主な性状	性状	評価・解釈
I	赤褐色	粘質土	地山土で構成される。テラス埋土と区別する。腐土の可能性あり。		
II	赤褐色	粘質土	風化が進んでいる。地山土で少量含む。		前庭部埋土
III	赤褐色	粘質土			前庭部埋土
IV	赤褐色	粘質土			前庭部埋土
V	赤褐色	粘質土			埋土
VI	赤褐色	粘質土			埋土
テラス状遺構土層					
I	赤褐色	粘質土			
II	赤褐色	粘質土	地山土・土層を含む。		
III	赤褐色	粘質土	風化が進んでいる。		
IV	赤褐色	粘質土	3層とは明確に区別		
V	赤褐色	粘質土			



第231図 39号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図

### 3) テラス状遺構

本横穴墓羨門壁頂部の斜面上約4m付近に斜面に沿って約30°の傾斜で掘り込みが認められた。地山整形は斜面に沿って直行しており、長さ4.5m程ではほぼ直線状となる。上場線は標高34.5mであり、約0.4mの落差がある。

テラス状遺構内の堆積土壌はその性状から比較的明瞭な層区分が可能であり、全体で3層群5層に分層した。以下堆積順に説明を加えたい。

第1層群(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層)は、第1次墳丘埋土でⅢ層は黒褐色の風化土層である。

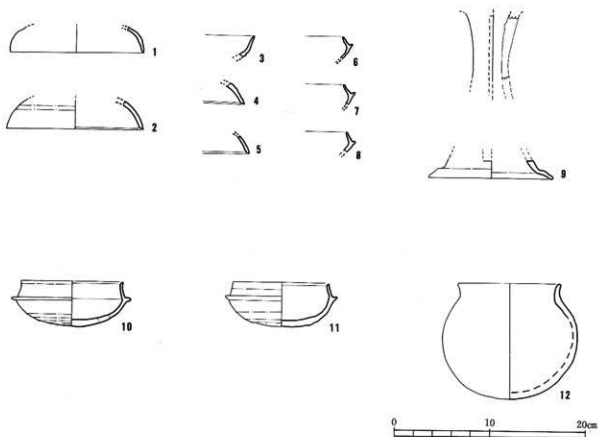
第2層群(Ⅱ層)は、地山礫を多量に含む第2次墳丘埋土である。若干の遺物(第232図1~9)を含んでおり、幾分風化している。第1層群とは整合面をなす。

第3層群(Ⅰ層)は、茶褐色の基盤層二次堆積土である。

### 3. 遺物の出土状態

#### 1) 玄室内

玄室内には中央に土師器壺1(第232図12)、礎床側に刀子1、側壁北側に須恵器杯1(第232図11)、羨門は中央に須恵器杯1(第232図10)がそれぞれ検出された。刀子は先端を北に向けている。(友岡信彦)



第232図 39号横穴墓出土遺物実測図

第88表 39号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	へう記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	坏蓋	・13.9 ・2.5+ $\phi$ ・—	口縁部は外反しながらほぼ直下にのび、端部は、とがりがみで丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
2	坏蓋	・14.4 ・3+ $\phi$ ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
3	高坏	・— ・— ・—	口縁端部は丸く内傾する段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻	坏部片	
4	坏蓋	・— ・— ・—	口縁端部は内傾するうすい凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を少量含むが精緻	良好 精緻	破片	
5	坏蓋	・— ・— ・—	口縁端部は内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を少量含むが精緻	良好 堅緻	破片	
6	坏身	・11.8 (復元) ・— ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は細く上外方にのび、端部は、ややとがりがみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色、青灰色	精緻	良好 堅緻	破片	
7	坏身	・12.0 (復元) ・— ・—	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は細く上外方にのび、端部は、ややとがりがみ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精緻	良好 堅緻	破片	
8	坏身	・12.6 (復元) ・— ・—	たちあがりは内傾してのび、端部はややとがりがみ。受部は短く水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰黒色	精緻	良好 堅緻	破片	
9	高坏	・13.1 (口径) ・17+ $\phi$ ・—	脚部は下外方にのび、端部付近で、さらに外反し丸い。スカシ窓があるようだが詳細不明。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	黒色 黄灰色	石英粒を少量含むが精緻	良好 堅緻		
10	坏身	・10.7 ・4.7 ・12.4	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する凹面をなす。受部は、やや肥厚して水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻	受部、底部に重ね焼き跡あり	
11	坏身	・10 ・4.6 ・11.8	たちあがりは内傾してのび、端部は内傾する面を有す。受部は、水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色 灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻	底部に重ね焼き跡あり	
12	小型蓋	・10.9 ・12.1 ・14.3	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、ほぼ円形を呈し、底部は深く丸い。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ (器面が荒れている)	淡茶褐色 茶褐色 明褐色 黒色 褐色	角閃石、長石、雲母微砂粒、石英粒が多量に含まれる	良好	土師器 口縁部2ヶ所に故意にうち欠いた部分あり	

## 40号横穴墓

### 1. 立地、調査前の状況

40号横穴墓は北支群南寄りの斜面に立地し、南西方向に開口する。全長は約10.4mで、標高は墓道前面の上場で34.9m前後を測る。玄室主軸方向はN-60.5°-Eを測る。保存状態は墓道が中世の溝で切られているもの、おおむね良好であった。斜面の遺構検出中に本横穴墓の供献土器群及び堆積埋土が検出され発見の契機となった。調査以前には横穴墓の存在を示すような前庭部の落ち込みや天井部の陥没等は認められなかった。調査は供献土器群の検出、検討を進めつつ、順次墓道プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査を行った。閉塞施設除去後、玄室内の崩落土等の埋土除去作業を行い、遺物・礎床施設等の調査を実施した。

### 2. 規模、構造

#### 1) 墓道、羨門部

a) 規模、構造 墓道は長さ約7.6m、幅は墓道前方で約2.5mを測る。入口から約2.5m手前で急激に狭まり、入口へと続く。墓道床面はゆるい凹凸はあるもののほぼ平坦に整形されている。最大幅は約1.3mで羨門部に向けて広がる平面形を呈している。床面傾斜は羨門部前面から約1m付近までは平坦に移行し、その後約10°の傾斜で2m付近まで下降する。2~3m付近で再び平坦面をなし、それ以後約8°の傾斜で入口に至る。墓道前面は羨道部より続く排水溝が検出された。側壁の傾斜は両者とも約80~82°でほとんど差異がない。また羨門部壁の傾斜は約6.5°を測る。

羨門部分は特に天井部分において崩壊が著しく、旧状を損なっている。側壁残存部から幅は約0.56mと測定できるが、高さは不明である。

閉塞施設は板石と地山円礫を使用し、ごく簡単に構築されている。まず玄室~羨道部から敷かれている敷石を根石とし、安山岩板石を2枚使い羨門部を覆っている。その後、小形の板石及び破片4枚を使用し、閉塞石上部と下部の隙間を覆うように配置している。さらに地山円礫1個が検出されたが、検出時の閉塞施設には影響を与えるものではない。現存する閉塞施設以前に利用された閉塞石と推定している。

b) 墓道内埋土 墓道内の堆積土壌は、切り合い及び後世の擾乱等で層区分の複雑な部分があったが、全体で6層群16層に分層した。以下堆積順に説明を加える。

第1層群 (XⅢ層) は、横穴墓形成直後に堆積した基盤層の二次堆積物である。羨門部入口から4m付近まで堆積している層厚は10~20cm前後を測る。

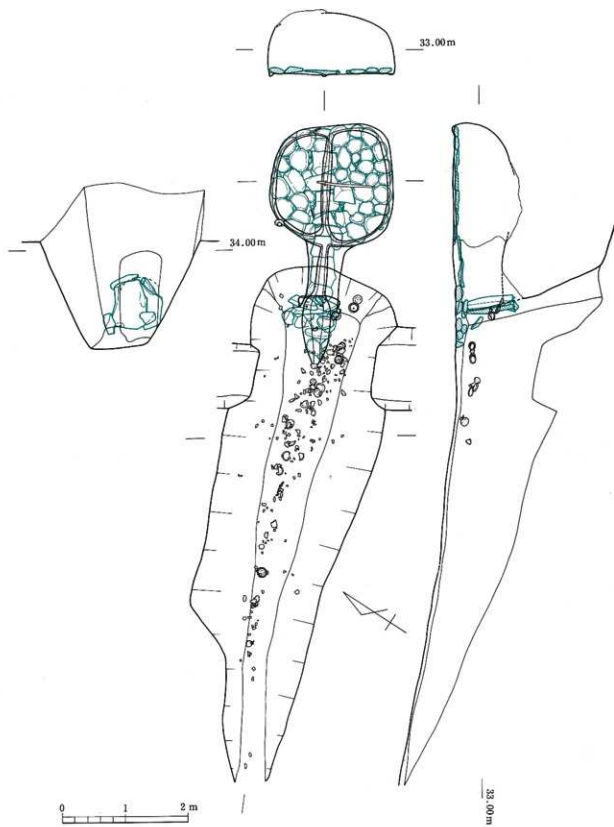
第2層群 (XⅠ・XⅡ層) は、第1層群を1部分覆って墓道中央付近に堆積している。土層観察の結果、羨門部付近並びに上面は次の埋葬時に整地されたと思われる。本層群はさらに2層に細分される。下層は粘質土層であり、基盤層と成分構成はほぼ同じである。また炭化物片を含み、若干の腐植土が混入している。上層は下層の一部を覆って墓道入口まで堆積している。遺物・炭化物片を含み、風化が進んでいる。本層群を初葬時の墓道内埋土と推定している。

第3層群 (IX層) は、羨門部から約3.5m付近から入口に向かって堆積している。羨門部付近は整地されていて残存しない。下層群とは整合面をなす。本層群は単層でやや暗色の粘質土層であり、風化が進んでいる。埋土中には、遺物・炭化物等を含む。本層群を2度目の埋葬時の墓道内埋土と推定している。

第4層群 (Ⅶ・Ⅷ・X層) は、羨門部壁上部から墓道部全面を覆って堆積している。これを堆積順にみていくと、第1次埋土は閉塞施設を覆って墓道前面に堆積している。さらにその後第2・3次埋土の堆積が行われたと推定している。その間に、遺物の埋置等の行為を行った痕跡がうかがわれた。本層群を土層観察でみる限り、3度目の埋葬時の墓道内埋土と推定しているが、断定はできていない。

第5層群 (XⅣ~XⅥ層) は、墓道上を南北に走る中世の溝跡の堆積埋土であり、本横穴墓に付随する土層群ではない。水が流れたと思われる土層の堆積状況がうかがわれる。





第233图 40号横穴墓基·断面图

第6層群（Ⅰ・Ⅱ層）は、後世の二次堆積土及び家屋建築時の攪乱土層であり、本横穴墓の墓道内埋土ではないと推定している。

本横穴墓では土層観察の結果、少なくとも3回の埋葬行為が行われたと推定している。

## 2) 羨道、玄室

羨道は床面で幅0.5～0.6m、長さ約1mを測る。床面は板石と河原円礫を敷石として使用している。敷石除去後は中央部に幅15cm前後の排水溝が付設されていた。この排水溝は玄室から延びてきており、羨門部付近で急に膨らみ墓道へと続く。床面はほぼ平坦で標高32.6mを測る。

玄室は天井部の崩落が若干認められるものの残りが良く、ドーム形を呈している。長さ約1.8m、幅約2mで隅丸方形を呈している。高さは1mを測る。床面は羨道部から連続して中央奥壁付近まで縦一列に安山岩板石を敷いている。次に壁を巡る様に、やや大形の扁平河原円礫を敷きつめている。その後前者の隙間に円礫を敷きつめる。最後に敷石間の隙間を埋めるよう5～10cm前後の小礫を補填している。敷石除去後の床面は標高32.6m前後であり、ほぼ平坦である。この床面は羨道部からはほぼ同レベルで続く。玄室壁の周囲及び中央を縦断するように幅15cm前後の排水溝が検出された。この排水溝は玄室入口付近で1条となり羨道部から前庭部へと続く。敷石と排水溝の関係であるが、先に触れた様に、前庭部～羨道部～玄室と縦に敷かれた敷石と玄室壁沿いに巡らされた敷石は共に排水溝を覆い隠している。この行為は敷石の配列状況を知る上で貴重な事例である。

## 3. 遺物の出土状態

### 1) 玄室内

玄室からは骨片・須恵器・鉄製品等が検出された。須恵器は提瓶（第236図32）で玄室北西のコーナー付近で立てかけた状態で検出された。そばからは耳環が1個敷石上で検出された。その位置から約0.5m南では刀子が1点検出されている。骨片は玄室中央付近で検出されたが原形は保っていない。骨片のそばで直刀1振りか検出された。先端は南向きで、刃部は西方向に向けられている。鉄鍔は奥壁沿い中央に、先端を北へ向けて2点検出された。さらに南側壁沿い中央に4本検出されたが、埋土除去作業中に動かされ正確な位置は不明である。次に副葬品と埋葬人骨の関係を考えると、耳環・提瓶・刀子が大幅に移動していなければ同一埋葬者の副葬品と考えることができる。他方骨片と直刀の関係であるが、これは骨片を残している埋葬者の副葬品と推定している。

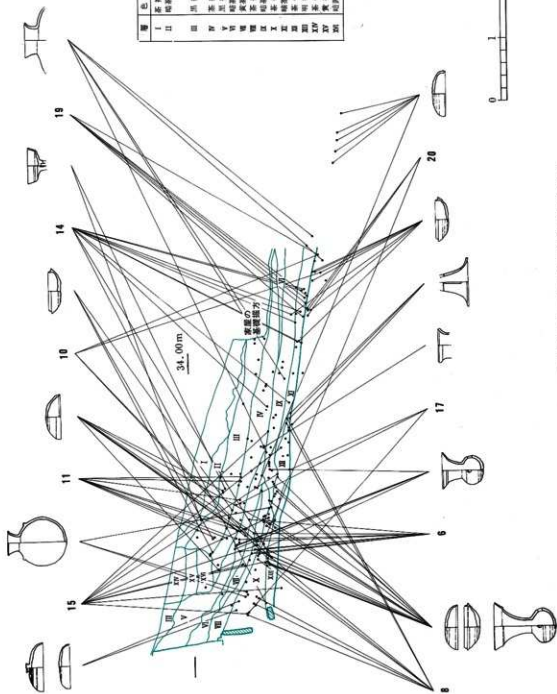
### 2) 墓道内

墓道内埋土からは第4層群から多量の遺物が検出された。第4層群下面からの出土であり、A群は閉塞施設の右に埋置している。坏蓋1（第235図1）・有蓋高坏の蓋1（第235図2）・提瓶1（第235図5）である。標高は33.1～33.3mである。B群は坏蓋・身2（第235図3・4）のセットであり、A群から0.5m入口方向に位置する。標高は32.8mを測る。C群は甕1（第235図9）・坏蓋3（第235図6・7・10）・坏身1（第235図8）の群でありB群から0.3mほど離れた地点で検出された。D群はC群から0.2～1m程度離れた地点で検出された。坏蓋2（第235図13・15）・坏身2（第235図16・17）・甕1（第235図12）・短頸壺1の群である。D群は遺物同志間の距離、高さとも若干離れている。標高は32.4～32.7mを測る。以上の様にA・B・C・D群と群別に分けたが、土層の堆積状況、遺物の接合関係、出土状況、方向などでみるとA～D群及び群の周囲に点在する破片等、全てをまとめて一群をなしていたのではないかと推定する。A群の存在する位置付近にこの一群が一括埋置の状態で置かれ、墓道内埋土を行うことによって墓道入口の方向へ移動したものであろうと推定している。

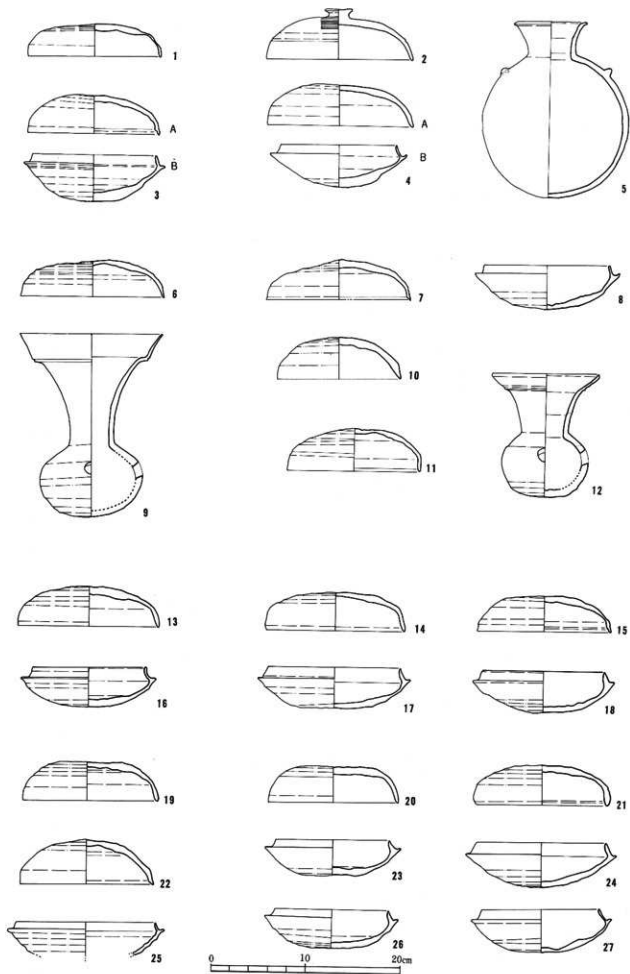
（友岡信彦）

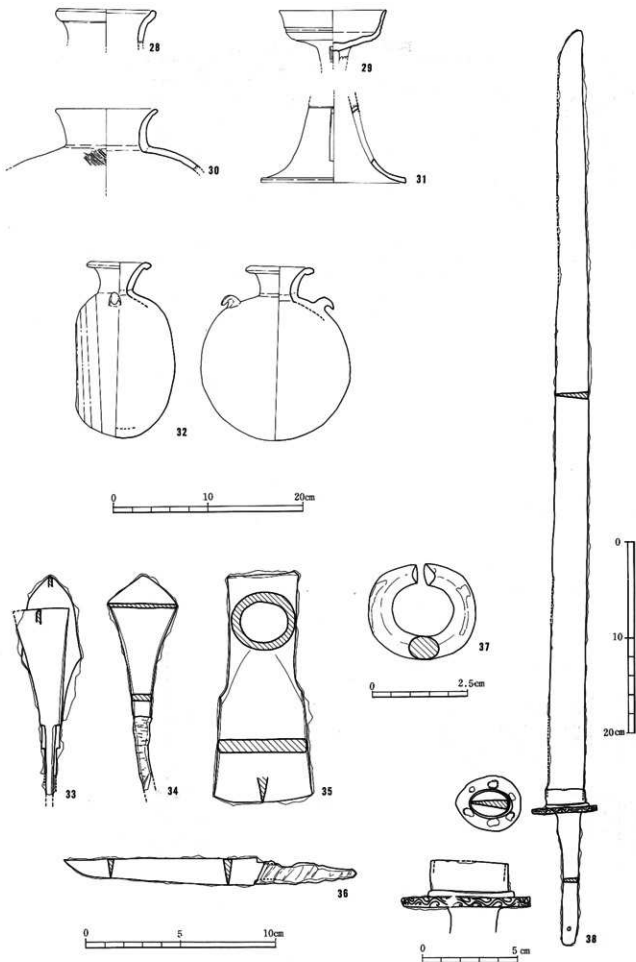
40号横穴墓土層観察表

層	色	質	性状	詳細・備考
I	茶褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
II	緑褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
III	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
IV	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
V	緑褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
VI	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
VII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
VIII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
IX	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
X	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XI	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XIII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XIV	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XV	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XVI	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XVII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XVIII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XIX	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XX	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	
XXI	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	横穴墓跡の遺構を主として土層の成土に伴って風化した土層である。
XXII	黒褐色	粘質土	粘り強、骨一筋・土層と少量含む。	



第234図 40号横穴墓縦断土層及び遺物垂直分布図





第236图 40号横穴墓出土物実測图(2)

第39表 40号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形 態 の 特 色	技 法 の 特 色					備 考	ヘラ記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
1	坏 蓋	・14 ・3.5 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色	石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
2	坏 蓋	・15.1 ・5.4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く平ら。外面頂部にツマミがつく。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
3   A	坏 蓋	・13.8 ・4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段をなし、天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
3   B	坏 身	・13 ・5 ・14.9	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
4   A	坏 蓋	・15.3 ・4.3 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや高く、平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石、金雲母の微細粒を含む	良好		
4   B	坏 身	・12.2 ・4.4 ・14.4	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1~3mmの石英粒を多量に含む	良好 堅緻		
5	洗 瓶	・7.8 ・18.3 ・15.4	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。胴部は、円形を呈し外面両側に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	黄褐色	石英、長石粒を含む	やや不 良		
6	坏 蓋	・15.4 ・3.7 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する面をなす。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、白色粒を含む	精緻 良好		
7	坏 蓋	・15.1 ・4.2 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾するゆるい段をなす。天井部はやや高く、平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	1~5mmの石英粒を微量含む	良好 堅緻		
8	坏 身	・13.2 ・4.7 ・15.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	精緻	良好 (やや軟質)		
9	甗	・15 ・19.2 ・10.8	口頸部は外反しながらのび、端部付近で、さらに屈曲して外反し外面に沈痾をなす。端部は丸い。胴部はだ円形を呈し、やや上方に穿孔あり。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石の微粒子を含む	良好		
10	坏 蓋	・13 ・4.4 ・一	口縁部は外反しながらのび、端部は、細くなり、とがきみ。天井部は高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含む 精緻	良好 堅緻		
11	坏 蓋	・14 ・4.4 ・一	口縁部は外反しながらほぼ直下へのび、端部は、内傾する面をなす。天井部は、やや高く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒灰色	細砂粒2~3mmの石英粒を含む	良好		

番号	種類	法 量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技 法 の 特 色					備 考	へう記号の有無
				内 面	外 面	色 調	胎 土	焼 成		
12	皿	・11.2 ・13 ・9.2	口縁部は外反しながらのび、端部付近でさらに外反し外面に一本の突帯がつく。胴部は、だ円形を呈し、やや上方に穿孔あり。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	黒灰色 淡黄褐色	石英、長石の微粒子を含む	良好		
13	坏蓋	・14.8 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや低く丸みをおびる。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1mm大の石英粒を含む 精微	良好 堅緻		
14	坏蓋	・14.3 ・4 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は、やや低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-3mm大の石英粒を含む	良好 堅緻		
15	坏蓋	・14 ・3.7 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。内面にうすい凹面をなす。天井部はやや低く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
16	坏身	・11.8 ・4.2 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	暗青灰色 灰色	石英粒を含むが精微	良好 堅緻		
17	坏身	・13.8 ・4.2 ・16	たちあがりは内傾してのび、端部はややとがりきみ。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	石英粒を含むが精微	良好 堅緻		
18	坏身	・12.9 ・4.4 ・14.8	たちあがりは直立きみに内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を少量含むが精微	良好 堅緻		
19	坏蓋	・14.4 ・4.1 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰白色	2-4mm大の石英粒を含む やや粗い	不良		
20	坏蓋	・13.6 ・3.8 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。天井部は低く平らである。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ 削り残し部分有	青灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
21	坏蓋	・13.9 ・4.2 ・—	口縁部は外反しながらは直下にのび、端部は丸く内面にうすい沈帯をなす。天井部はやや高く平らである。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色 黒色	1-3mm大の石英粒を含むが精微	良好 堅緻		
22	坏蓋	・14 ・4.7 ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は内傾する段を有す。天井部は高く丸みをおびる。	直線ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色-黒 灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		
23	坏身	・12 ・3.8 ・14.2	たちあがりは内傾してのび、端部はとがりきみで丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	石英粒を含むが精微	良好 堅緻		

番号	器種	法量 ・口径 ・器高 ・胴部最大径	形態の特色	技法の特色					備考	ヘラ記号の有無
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
24	坏身	・13.5 ・4.6 ・15.8	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	1-2mmの石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
25	坏身	・14.6 ・4 + α ・16.6	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、水平にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	細砂粒を含む	良好		
26	坏身	・12 ・4.1 ・14	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、やや肥厚しながら水平にのび、端部は丸い。底部はやや深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	灰色	石英、白色砂粒を多量に含む	良好		
27	坏身	・12.2 ・4.6 ・14.7	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部は、上方向にのび、端部は丸い。底部は深く丸みをおびる。	回転ナデ 調整ナデ	回転ナデ 回転ヘラケズリ	青灰色	2-3mm大の石英粒を含むが精緻	良好 堅緻		
28	壺	・9.8 ・— ・—	口縁部は外反しながらのび、端部は面をなして肥厚し、段をなす。	回転ナデ		灰-灰白色	細砂粒を含む	良好		
29	高坏	・11.2 ・5 + α ・—	坏部の口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。外面にうすい稜がみられる。三方向にスカシあり。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	淡青灰色 黒灰色	石英の細砂粒を多量に含む	良好		
30	横瓶	・10.8 ・— ・—	口頸部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ 用心円タタキ	回転ナデ 平行タタキ	青灰色-セピア色	石英粒を含む	良好 やや軟質		
31	高坏	・15.3 (底径) ・8 + α ・—	脚部は下方向にのび、端部は面をなす。長脚二段スカシ	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	石英粒を含む	良好		
32	提瓶	・6.8 ・18.2 ・15.8	口頸部は外反しながらのび、端部は面をなす。胴部は円形を呈す。外側両肩に把手がつく。	回転ナデ	回転ナデ 回転カキ目	青灰色 緑灰色	石英、長石の微細粒を含む	良好		

第90表 40号横穴墓出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (J部)	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
33	鉄鏃	10.5以上	8.9	3.1	0.6	0.2	0.2	
33	同上	10.8以上	6.0	3.0	0.5	0.2	0.3	
34	同上	11.3以上	7.3	3.7	不明	0.2	不明	
35	鉄斧	12.0	5.6	5.2	3.4	0.6	0.5	
36	刀子	15.3	10.1	1.3	不明	0.3	不明	
38	直刀	94.8	80.8	3.6	2.0	0.6	0.4	銅に銅象嵌で嵌手文様あり



---

上ノ原横穴墓群 I

- 般国遺10号線中津バイパス発掘調査報告書(II)

1989年3月

編集 大分県教育庁管理部文化課  
発行 大分県教育委員会  
印刷 明治印刷株式会社

---